立教大学ボランティアセンター
2021 年度活動報告書

2022 年 3 月

立教大学ボランティアセンター

はじめに

コロナ禍のボランティア活動

ボランティアセンター長　首藤　若菜

2021 年度は、昨年度に引き続き新型コロナウイルスの感染拡大により、大学も大きな制約を受けました。

本学では、春学期はオンライン授業がメインとなり、部活動やサークル活動にも自粛が求められました。友人と会う機会が減り、そもそも友人を作る機会さえ持てなかった人も少なくなかったと思います。飲食店での営業自粛が広がったことにより、アルバイトができなくなり、学費や生活費の工面に苦労した人もいたと思います。若者が孤独感を深め、心身の不調を訴えていることや、大学で退学者が増加していることは、社会問題にもなりました。

ただ、秋には感染者数が減少したことにより、部分的ではありましたが、対面授業が再開し、キャンパスに多くの学生が戻ってきてくれました。学内を歩けば、学生たちとすれ違い、マスク越しではあるものの、賑やかな声を聞くことができました。かつては当たり前だったキャンパス風景ですが、まるで大学が息を吹き返したように感じました。

ボランティア活動も、秋口には感染に注意しながら、部分的に活動を再開させることができました。ただ 1 年を通じては、多くのイベントを実施することができませんでした。本学院の一貫教育の柱ともいえる清里環境ボランティアキャンプは、2 年連続で中止となり、長い歴史をもつ山形県高畠町で行う農業体験も、開催することが叶いませんでした。

やむを得ないとはいえ、何年にもわたり中断が続くと、これまで蓄積してきたノウハウを引き継ぐことが難しくなっていくことが懸念されます。そこで、来年度は、感染に気をつけながら、たとえ小規模であっても再開できないかと、今年度からより具体的な検討を開始しました。

また、オンラインを活用した新たな取り組みにも挑戦しました。例えば、2021 年 12 月には、バリアフリー映画上映会を開催しました。学生メンバーを募り、上映する映画を話し合い、「バリア」とは何なのか、バリアを自分事として考えると何に気づくのかなどの議論を重ねました。当日、映画『だれもが愛しいチャンピオン』を上映し、観賞後にはオンライン上での座談会を開催し、参加者とともに感想を共有しあう機会を持ちました。画面越しではあったものの、学生メンバーたちの生き生きとした表情が大変印象的でした。

ボランティアは、人と人が対面で接し、会話したり、触れ合ったりすることを前提としたものが多いため、コロナ禍のボランティア活動は容易に進みません。ただ、そうしたなかでも、何ができるか、何かできることはないかを、ボランティアセンターの職員、コーディネーターとともに懸命に考え、模索した 1 年間でした。

今後の状況はまだ見通せませんが、今年度の試みが次年度につながり、少しずつ活動を再開できることを祈っております。

目次

はじめに…… ボランティアセンター長　首藤若菜
Ⅰ. 利用状況…… 3
Ⅱ. 2021 年度の支援 …… 5
Ⅲ. 授業…… 7
Ⅳ. ポール・ラッシュ博士記念奨学金…… 9
Ⅴ. 開催プログラム報告…… 11
Ⅵ. 講演・座談会…… 37
Ⅶ. ボランティアセンターの概要…… 55
Ⅷ. ボランティアセンター運営協議会委員一覧（2021 年度）…… 57

Ⅰ．利用状況（2021 年４月～12 月末）

1．団体登録・ボランティア募集件数

※新型コロナウイルス感染症により 2020 年度のデータがないため（）内は 2019 年同時期の数としております。

（１）登録団体数

登録団体総数	**157**（189）
新規登録	**4**（44）
既存登録	**153**（145）

（２）登録団体によるボランティア募集件数

ボランティア募集件数	**38**（149）

ボランティア募集の他に、ポスター掲示、チラシ配布依頼多数

（３）領域別ボランティア募集件数

領域	総数
教育	**13**（38）
福祉	**12**（42）
環境	**5**（21）
地域・災害	**4**（10）
国際	**2**（16）
その他　※	**2**（9）
文化・スポーツ	**0**（13）
合計	**38**（149）

「ボランティア情報シート」に記載したもののみの件数。募集のチラシ等の配架のみの依頼は含まれていない（しょうがい者支援や学習支援などの依頼がある）。

※非行少年支援ボランティア、犯罪被害者支援ボランティアなどが含まれている。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ボランティアの募集件数は著しく減少したが福祉系ボランティアや学習支援などの教育系ボランティアはコロナ禍でも社会的需要が高かった。

２．登録団体からのご意見

（2022 年１月実施、団体向けアンケートより抜粋）

※今年度は全団体ではなく、参加者数が多い団体に限定して実施。

コミュニティ福祉学部の４年生が１名、週に２回昨年から来ている。非常に物静かだが、次第に子どもたちとうまく関われるようになってきた。困っていることなどは全くない。他大学の学生も数名ボランティアで来ているが、３・４年生なので、ぜひ１・２年生に来てほしい。

ボランティアサークルの学生とのオンラインでの交流・おもちゃの寄贈があった。

現在、立教生は 55 名活動に参加している。コロナ禍ということもあるが、昨年よりは多い。立教サービスラーニング（RSL）科目で参加した学生が、引き続きボランティアとして来てくれるケースも多い。
また、授業経由で活動に関心をもって始める学生もいた。みな、子どもたちと積極的に関わり楽しそうに活動をしている印象である。改善点・困っている点などは特にない。

集会場で子ども達の見守りをするボランティアであったが、子どもと積極的に関わってくれてとても助かっている。

半年間講座に参加した学生が１名いるが、課題にも積極的に取り組み優秀であった。

私たちにはない視点で子どもたちと関わってくれることが、本当にありがたいと思っている。感謝しかありません。

新型コロナウイルスの影響により、今年度はボランティア紹介があまりできなかったが、登録団体との関係性が途絶えぬように、今後もコミュニケーションを密に取りながら丁寧に関係性を築いていきたい。
また、学生のボランティア意欲を継続できるように、一人ひとりの学生から丁寧にヒアリングをし、その学生に合ったアドバイスや対応をしていくことが重要である。

３．センター利用

※新型コロナウイルス感染症により 2020 年度のデータがないため()内は 2019 年同時期の数としております。

（１）センター来所者

来所者数	519 (3,081)
池袋	361 (1,933)
新座	158 (1,148)

情報収集、相談・面談・打ち合わせ等でセンターを利用する学生の総数。なお、立教サービスラーニング（RSL）センター利用者等も含まれている。減少理由は新型コロナウイルスによるオンライン授業への切り替えや入構制限と考えられる。

（２）相談票記入者

利用登録者数	91 (651)
男	20 (148)
女	71 (503)

ボランティアセンター来所者の内、相談票を記入した人数。

また、入構制限によりキャンパスに来られない学生には、ZOOM によるオンライン面談も実施した。

（３）メールマガジン・SNS 登録者

メールマガジン登録者数	3,948 (3,442)
新規登録	93 (288)
Twitter フォロワー数	2,624 (2,062)
Instagram フォロワー数	203 (76)

メールマガジンは、原則月２回定期的に発行している。コーディネーターのコラムやボラカフェの様子、最新のボランティア情報などを載せている。
また、より多くの情報を届けるために、学生がよく利用する Twitter と Instagram でも情報を頻繁に発信している。

（４）センター利用動機ランキング（複数）

1	情報収集	68 (266)
2	相談（個人・国内）	37 (244)
3	ボランティア情報複写希望	15 (181)
4	相談（個人・海外）	5 (74)

センター利用動機の１位は、「情報収集」であり、特に子どもに関わる学習支援などの教育系分野のボランティア情報を探しにくる学生が多く見られた。

（５）学部別相談票記入状況　　（小数点第一位を四捨五入）

	学部	件数	単純増減数	全体比（%）
新座	コミュニティ福祉学部	19 (159)	-140	21 (24)
池袋	文学部	19 (146)	-127	21 (22)
池袋	法学部	13 (50)	-37	14 (8)
池袋	社会学部	11 (76)	-65	12 (12)
新座	観光学部	8 (65)	-57	9 (10)
池袋	経済学部	6 (51)	-45	7 (8)
池袋	異文化コミュニケーション学部	4 (15)	-11	4 (2)
池・新	その他（大学院・研究生）	4 (9)	-5	4 (1)
新座	現代心理学部	3 (45)	-42	3 (7)
池袋	GLAP	2 (0)	2	2 (-)
池袋	経営学部	1 (18)	-17	1 (3)
池袋	理学部	1 (17)	-16	1 (3)
	総計	91（651）	-560	

相談票記入者を学部別に集計した結果である。
2019 年度同様、コミュニティ福祉学部、文学部の学生が多く相談に来ている。
人数が減少した理由としては (1) のコメントを参照のこと。

（６）参加希望が多かったボランティア団体

団体	分野
東京都観光ボランティア事務局	国際
NPO 団体　カフェ塾テラコヤ	教育
新座市教育委員会生涯学習スポーツ課	教育
一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク	教育
野外教育事業所　ワンパク大学	環境

例年はランキング形式だが、新型コロナウイルス感染症により紹介件数が少なかったため、今回はランキング形式にはしていない。

Ⅱ．2021 年度の支援

コロナ禍における支援

今年度も新型コロナウイルスの影響を大きく受けているが、昨年度のオンラインプログラムでの課題を踏まえて、工夫を取り入れ、今年度も、臨機応変に「今できること」を考え、次のように支援を行ってきた。

１．広報の活性化

学生がボランティア活動に関心を持つきっかけとなるよう、昨年度に引き続き、SNS（Instagram、Twitter）やメールマガジンの発信に力を入れ、ボランティアセンターの活用を働きかけている。また、当センターのホームページの改修や大学のコロナ関連のホームページへの情報提供も行い、学生がわかりやすく利用できるよう工夫を重ねた。

新 2 年オンデマンド・ボランティアオリエンテーションの配信を行った。

２．学生サポーター制度の導入

2021 年度より、学生サポーター制度を開始した。ボランティア経験のある学生などに声をかけ、ピア・サポート組織を立ち上げ、現在 7 名が活動中である。その学生サポーターによる企画「ボランティアカフェ」の開催や、ボランティアセンターの行事へのサポートを行っている。

３．他部署との連携

学生の興味･関心の幅を広げるための様々な情報を届けるため､部署間で以下のような協力を行った。

①SNS、プログラムの相互協力

・学内他部署の SNS アカウントの相互リツイート

・キャリアセンターのオンラインガイダンス用資料に、当センターの情報を掲載（２回）

・サービスラーニングセンター（RSL）

正課（RSL）と正課外（ボランティアセンター）の往還として、両方の要素を取り入れた協同企画を実施→Ｐ.36

・東日本大震災復興支援本部・陸前高田サテライト

復興支援サークルと共に、「立教の 3.11」のワークショップを企画・開催

・しょうがい学生支援室

正課の授業「ボランティア論」のゲストスピーカーとして協力を依頼、バリアフリー映画上映会等に関わる相互協力。「音声ガイド講座」のワークショップを企画・開催

・渉外課（校友会事務局）・募金室・広報課

立教大学校友会の会報誌への学生ボランティア団体紹介記事の掲載、募集団体への物品供与の支援

②コロナ禍におけるボランティア活動について

学生部が定める「課外活動マニュアル」や「課外活動制限レベル」に従い、活動方針を決定している。緊急事態宣言発出時は、対面のボランティア活動を禁止、ボランティア紹介も停止し、オンライン活動・非接触型の活動（古着回収、おもちゃ作成等）を推奨していたが、制限レベルが緩和された今年度 11 月からは、昨年度より休止していたオンライン上のボランティア情報検索ツールである「ボランティアナビ」での情報公開も再開した。（※宿泊を伴うキャンプ等は不掲載）１月 25 日以降は制限レベルが上がり、再び対面のボランティア活動の禁止・ボラナビ情報公開が停止となった。

今後も、学内の方針に従いながら、学生たちを支援する。

新型コロナウイルス感染拡大防止に伴うボランティア活動について

活動制限指針（課外活動）を受けて、制限レベルに応じて、学生に注意点を周知した。

ボランティア活動を検討する際の注意点（掲載一部例示：レベル１　2021 年 10 月 18 日）

学生のみなさんが参加するボランティア活動が、新型コロナウイルスの感染の拡大につながる危険性があることをふまえて、「うつさない」・「うつらない」を常に念頭において周到な準備と慎重な行動をすることが求められます。また、ワクチン接種を受けても、感染する事例の報告が多数寄せられていますので、注意の継続をお願いします。

ボランティア活動においても、本学の『課外活動マニュアル』に基づき、適切な行動を行うことが求められますので、必ず確認してください。なお、本学としては、災害派遣、被災地復興支援など、活動の存続上どうしても宿泊が必要と認められるもの以外は、宿泊を伴うボランティア活動は、自粛を求めています。宿泊の可否および必要な感染予防対策に関しましては、ボランティアセンターなど、担当部局までお問合わせください。

具体的には、**①感染予防対策を行うこと、②連絡先・行動履歴を把握すること、③活動先と感染予防対策・感染情報についての十分なコミュニケーションを取り、活動先の感染予防対策に従うこと、④保護者の同意を得ること**が必要となります。

①感染予防対策を行うこと

個人やメンバーの健康管理、不織布マスクの着用、こまめな手指消毒、三密の回避などのソーシャルディスタンスの確保および活動場所の換気の徹底に留意ください。懇親会や食事会の開催は禁止とします（子ども食堂などの活動の存続上どうしても必要なものは除きます）。夜 20 時までに活動を終了してください。

②連絡先・行動履歴を把握すること

万が一、活動において感染および濃厚接触者の指定を受けた場合は、大学や保健所の指示に基づいて、適切な対応を取る必要があります。その場合、連絡先や行動履歴を確認する必要がありますので必ず把握してください。

③活動先と感染予防対策・感染状況について十分なコミュニケーションを取り、活動先の感染予防対策に従うこと

活動先に本学の『課外活動マニュアル』を遵守いただくように説明してください。また、ワクチン接種が進んでいますが、依然として、活動先には子どもや高齢者、基礎疾患をお持ちの方、ワクチンが事情により打てない方など、感染したら重篤な状況になる可能性が高い人もおられます。必要な対策について、十分に確認したうえで活動してください。

④保護者の同意を得ること

万が一、活動において感染および濃厚接触者の指定がなされた場合は、同居のご家族の方などにも感染リスクが及ぶこととなります。必ず、保護者の方の同意を得てから活動してください。

また、活動する際は、自分自身の意思で参加するかどうかを決め、自己責任の範囲で活動してください。

なお、自分自身の感染・濃厚接触者の指定やご家族など身近な方の感染が確認された場合は、指定された大学への連絡方法に加え、活動先とも必ず連絡を取ってください。

なお、ワクチン接種により活動の再開を検討されている方で、諸注意点の確認を希望される場合は、ボランティアセンターまでご相談ください。

Ⅲ．授業

１．ボランティア論

授業名	全学共通科目　コラボレーション科目 ボランティア論～転換期を迎えた社会で求められること～		
曜日 時限	春学期　火曜日２限：10:45～12:25　　2021．４.13（火）～ ７.20（火）		
方法	Zoom を利用したオンライン授業		
担当者	結城俊哉（コーディネーター、ボランティア副センター長、コミュニティ福祉学部教授）、豊永はるか（兼任講師）、ゲストスピーカー		
履修者数	110 名		
内容	＜授業のねらい＞ 漠然としたボランティアのイメージを、いくつかの事例を通じて、具体的なイメージとして理解できるようにします。またボランティアを考えることを通して、自分と社会の接点を意識できるようにし、社会問題を自分の頭で考えられるようになり、実際の行動へとつなげられるようにします。そして、ボランティア経験を自分の言葉で発信し、自分のキャリア形成を考えることができるようにします。 ＜授業内容＞ 2020 年から世界を新型コロナ感染症問題によりコミュニティにおける対人関係の変化が余儀なくされている。今回、コロナ禍の中で多くの市民が「共に生きることができる社会」を目指す新しい価値や活動が求められています。授業では、ボランティア活動について、ボランティアを提供する側だけでなく、サポートを受ける側の気持ちも汲み取りながら、日常的な活動だけでなく、災害や海外での支援、企業の社会貢献活動等の様々な切り口から、現場で活躍されている方々のメッセージも交えて多面的に検討し、社会に潜む諸問題に対して自分自身の視点から能動的にとらえられる学生へと成長できるようにします。		
	氏名	現職	専門分野（テーマ等）
担当講師	コーディネーター 結城　俊哉	ボランティア副センター長　、 立教大学コミュニティ福祉学部教授	ソーシャルワーク論、障害者福祉論、ノーマライゼーション論、ケア論
	兼任講師 豊永　はるか	日本財団 学生ボランティアセンター	ワークキャンプ、国際交流、災害ボランティア等
	磯田　浩二	NPO 法人グッド　代表	ワークキャンプ、国際交流、ユースワーク
	関根　正孝	一般社団法人ピースボート 災害支援センター	災害ボランティアにおいて学生にできること
	土屋　匠宇三	一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク代表理事	相対的貧困問題、学習支援教室と学生ボランティア
	森田　たいしん	フリージャーナリスト	ボランティア体験を言葉にする
	奥山　葉月	ＮＰＯ法人自立生活センター（CIL）立川	しょうがいしゃの地域生活支援とコロナ渦におけるボランティア（当事者の視点から）
	大倉　智	株式会社ドーム取締役	地域と社会が連動した取り組み（ス

		執行役員 CSMO	ポーツを通じた街づくりから）
	上田　英司	認定特定非営利活動法人 日本 NPO センター　事務局次長	企業の社会貢献活動（NPO と企業の連携をサポートする視点から）
	寺内　崇	大島町立つばき小学校 副校長	立教大学在学中のボランティア活動と、その後のキャリアについて
	藪本　雅子	フリーアナウンサー （元日本テレビアナウンサー）	ソーシャルな観点から仕事をする―ハンセン病報道
	福井　崇人	一般社団法人 2025PROJECT 代表理事	ソーシャルデザイン
授業内容 全 14 回	１．（４.13）オリエンテーション ２．（４.20）ボランティアの歴史と概要 ３．（４.27）ボランティアを取り巻く社会 ４．（５.11）立教生が取り組んでいるボランティア ５．（５.18）一歩踏み出す。世界、広がる―「気持ちの良い人間関係」をもたらすワークキャンプ ６．（５.25）災害ボランティアについて～学生にできることは？～ ７．（６．１）地域における学習支援について ８．（６．８）ボランティア体験を言葉にする ９．（６.15）ボランティア活動の発想を転換する力～COVID19 がもたらした社会の中で～ 10.（６.22）地域と社会が連動した取り組み 11.（６.29）企業が取り組む社会貢献活動―NPO と企業の連携 12.（７．６）支えることと支えられること 13.（７.13）ソーシャルな立場から仕事をする―ハンセン病報道への想い 14.（７.20）ソーシャルデザイン―アイデアが社会を変える（授業の総まとめと振り返り）		
まとめ	昨年に引き続き、オンラインでの開講となった。オンラインに伴い、新座キャンパスの学生も多く履修することができた。配当教室により、従来よりも履修者は少なかったが、定員 110 名のなか、出席率も毎回 90％近く、リアクションペーパーの提出も非常に良かった。 ゲストスピーカーとして様々なボランティアの現場で活躍されている方にお話いただき、現場の持つ課題や、活動の魅力などを伝え、ボランティアをすることを想像できるよう工夫を凝らした。Google フォームを利用したリアクションペーパーによる質問に対して、翌週までには必ず回答することで、教育的な効果も高めることができた。		

森田　たいしん講師

藪本　雅子講師

Ⅳ．ポール･ラッシュ博士記念奨学金

１．概要

ポール・ラッシュ博士記念奨学金は、キリスト教の精神にもとづいて、地域、教会、病院などへの奉仕活動を生涯にわたって実践された､元本学名誉教授ポール･ラッシュ博士を記念して設けられました。この奨学金は、キープ協会在米後援会（キープ協会は、地域活動、キリスト教学生活動などの拠点として同博士が設立された機関です）、およびその他の有志によって寄贈された基金とその収益金をもとに支給されるものです。

この奨学金の目的は、ポール・ラッシュ博士の精神や生涯にわたる諸活動を記念し、本学学生の奉仕の精神に基づく諸活動を奨励し、援助することです。

対象・条件等は、次の通りとなります。

１．本奨学金は奉仕の精神に基づく活動を行う本学学生（個人または団体）を対象とする。「奉仕の精神に基づく活動」とは教育、福祉、環境保護、開発、国際交流、災害復興支援等、様々な領域における社会貢献を目的としたボランティア活動等を指し、活動の現場は国内外を問わない。

２．営利的活動、学術研究やそのための調査などを目的とした活動は対象としない。

３．本奨学金の主旨にかんがみ、申請者はポール・ラッシュ博士の生涯やキリスト教における奉仕の精神について学ぼうとする姿勢が求められる。

４．本奨学金採用者は、後日、キープ協会を訪問し、ポール・ラッシュ博士の精神や活動について学習する。

５．申請者（代表者）は当該年度の健康診断を受診していなければならない。

奨学金額は、年額合計 70 万円以内（給与奨学金）。

２．2021 年度募集説明会

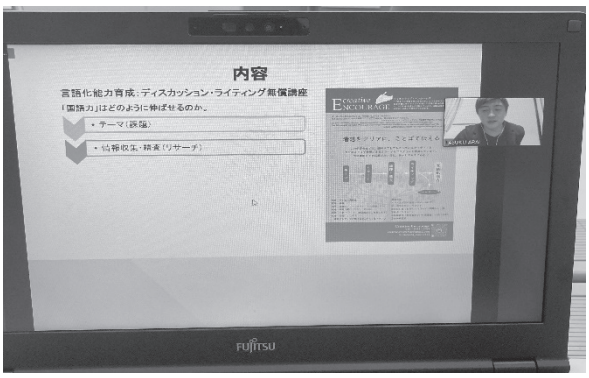
開催日時	2021．5．10（月）18:30～19:10
開催場所	オンライン開催　Zoom 使用
内容	（１）ポール・ラッシュ博士の人物像と立教大学におけるボランティア活動支援 ボランティアセンター副センター長　中川 英樹 （２）奨学金募集についての説明 総長室社会連携教育課課長　佐藤 一宏 （３）募集要項について 総長室社会連携教育課　阪下 利哉 （４）質疑応答
参加者数	17 名（本学学生 14 名、教職員３名）
今後に向けて	一度は説明会を開催したが、新型コロナウィルス感染拡大により、選考会を秋学期へ延期することを発表した。

開催日時	2021．9．27（月）12:30～13:00
開催場所	オンライン開催　Zoom 使用
内容	（１）ポール・ラッシュ博士の人物像と立教大学におけるボランティア活動支援 総長室社会連携教育課課長　佐藤 一宏 （２）奨学金募集・募集要項についての説明 総長室社会連携教育課　阪下 利哉 （３）質疑応答
参加者数	６名（本学学生４名、教職員２名）

今後に向けて	活動再開の見通しがたったため、再度、オンラインで説明会を開催した。事前申込者は15名であったが、参加者は４名であった。

３．ポール・ラッシュ博士記念奨学金

募集期間	2021. 9.28（火）～ 10.15（金）15:30
選考委員	首藤 若菜（選考委員長、ボランティアセンター長） 広田 勝一（チャプレン長、立教学院院長） 水谷 隆之（文学部）、森本 壮亮（経済学部）［学部順輪番委員］ ドノヴァン・ハーバード・A（経営学部）
選考日	2021.10.26（火）19:00～19:40　太刀川記念館第２会議室
受給者	新井　佑　文学研究科 ドイツ文学専攻 博士後期課程３年 「板橋区を拠点に、言語化能力育成、学習支援教室およびサードプレイスを開放する」28万８千円
授与式	2021.11. 9（火）12:30～13:00 場所：オンライン開催　Zoom使用 出席：淺田 豊久（公益財団法人キープ協会理事長） 桑田 秋光（公益財団法人キープ協会副理事長） 西原 廉太（総長） 首藤 若菜（選考委員長、ボランティアセンター長） 広田 勝一（チャプレン長、立教学院院長） 水谷 隆之（文学部） 佐藤 一宏（総長室社会連携教育課課長） 阪下 利哉（総長室社会連携教育課）
今後に向けて	2021年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、春学期中の募集を一旦中止としたが、感染状況が落ち着いた秋学期には、対面での選考会を実施することができた。なお、授与式は11月にオンラインにて行われた。2021年度は、「板橋区を拠点に、言語化能力育成、学習支援教室およびサードプレイスを開放する」に28万８千円の支給となった。 この企画は、板橋区に、通常期は、主に中高生を対象とした言語化能力育成のための学習指導、長期休暇には小学生を対象とした学習支援教室を運営し、特にコロナ禍で不足する子どもの学習場所となるサードプレイスを提供するという内容である。 今後の予定は、2022年３月上旬に活動・決算報告書が提出されることになる。また、例年、活動終了後に受給者の学生はキープ協会・清泉寮を表敬訪問し、キープ協会関係者に活動の報告を行い、ポール・ラッシュ記念館を見学するなど、交流の機会が与えられる。



オンライン授与式の様子

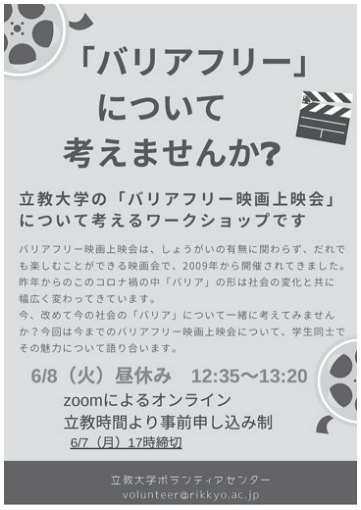
Ⅴ．開催ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ報告

2021 年度開催プログラム一覧

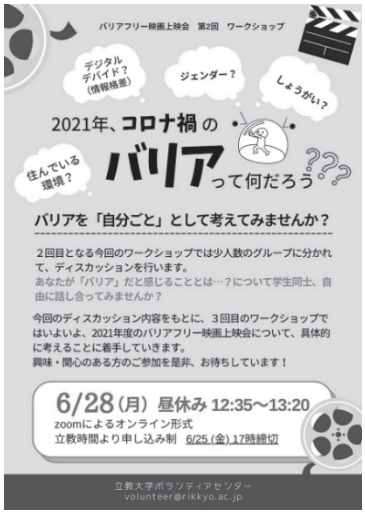
時期	プログラム名	実施方法	テーマ
春学期			
４月	ボランティアサークル緊急連絡会（コロナ対応、ハラスメント啓発、SNS・個人情報の注意について）	オンライン	知る
	学生サポーター定期ミーティング開始	オンライン	動く
	WelcomeWeek①、②、③、④、⑤	オンライン	知る
５月	WelcomeWeek⑥、⑦、⑧、⑨	オンライン	知る
６月	バリアフリー映画上映会ワークショップ①	オンライン	知る・動く
	ボランティア・プレサミット①	オンライン	知る
	バリアフリー映画上映会ワークショップ②	オンライン	知る・動く
７月	バリアフリー映画上映会ワークショップ③	オンライン	知る・動く
８月	バリアフリーコアメンバー夏の研修①	オンライン	動く
	学生サポーター夏の研修①	オンライン	動く
	バリアフリーコアメンバー研修②	オンライン	動く
９月	学生サポーター夏の研修②	オンライン	動く
	バリアフリーコアメンバー定期ミーティング開始	オンライン	動く
秋学期			
10 月	ボランティア プレサミット②	オンライン	知る
	ボランティア・カフェ(学生サポーター企画①)	オンライン	知る・動く
11 月	ボランティア・カフェ(学生サポーター企画②)	オンライン	知る・動く
12 月	バリアフリー映画上映会①（事前ワークショップ）	オンライン（池袋）	動く
	バリアフリー映画上映会②（上映会・座談会）	オンライン（池袋）	動く
	ボランティア プレサミット③	オンライン	知る
2022 年			
２月	災害救援ボランティア講座（～３月）	池袋	学ぶ
３月	サービスラーニングセンター（RSL）＆ボランティアセンター協同企画	オンライン	知る・学ぶ
	ボランティアサミット	オンライン	知る
	学生サポーター&ボランティアセンター懇談会	オンライン	知る・学ぶ
	ボランティア・カフェ(学生サポーター企画③)	オンライン	知る・動く

Online Welcome Week①

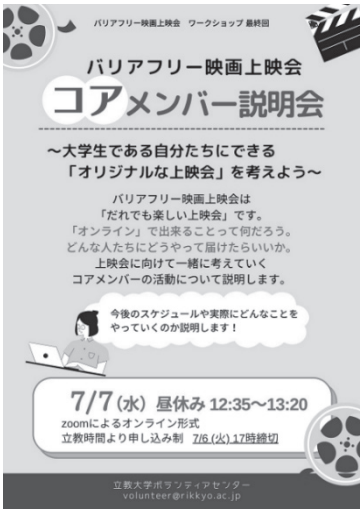
Online Welcome Week②



バリアフリー映画上映会
ワークショップ①

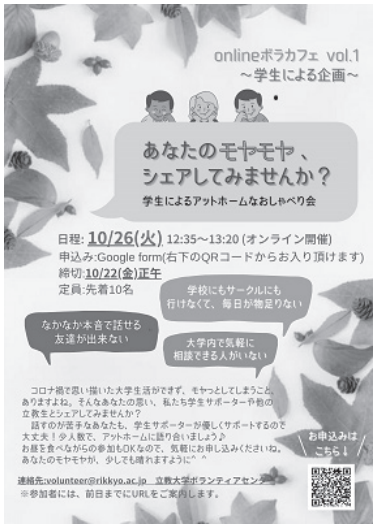


バリアフリー映画上映会
ワークショップ②

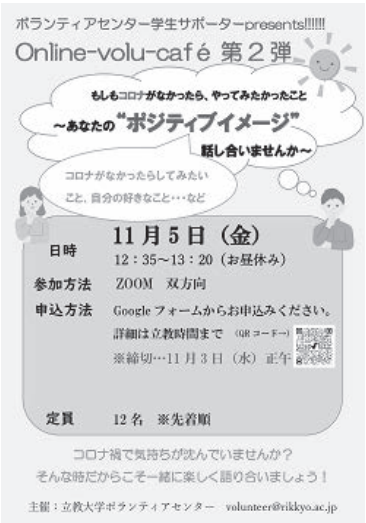


バリアフリー映画上映会
ワークショップ③

バリアフリー映画上映会
ポスター



ボランティア・カフェ
（学生サポーター企画①）



ボランティア・カフェ
（学生サポーター企画②）

サービスラーニングセンター（RSL）＆ボランティアセンター協同企画

１．学生の関心、問題意識の喚起

（１）バリアフリー映画上映会

開催日時	＜事前ワークショップ＞　2021.12.４（土）13:30 開始～15:00 終了 ＜上映会・座談会＞　　2021.12.11（土）13:00 開始～16:00 終了
開催方法	Zoom によるオンライン上映
タイトル	映画『だれもが愛しいチャンピオン』 （監督・脚本：ハビエル･フェセル、スペイン、2018 年､118 分）
主催・運営 協力	ボランティアセンター、バリアフリー映画上映会学生メンバー 車椅子バスケットボール埼玉ライオンズ しょうがい学生支援室、ボランティアセンター学生スタッフ
目的	立教大学独自のバリアフリー上映会として、しょうがいの有無に関わらず参加者全員が「ともに映画を楽しむ」とはどういうことなのか、学生自らが考えながら、企画・運営を行う。
内容	昨年度に続きオンライン上映会となったが、今年度は事前ワークショップおよび映画上映後に参加者による座談会という２日間構成で実施した。それぞれの内容をより有意義なものとする目的で、参加人数を各回先着 40 名とし、学内関係者（学生・教職員）に加え、映画の題材を考慮して、上映会の学生メンバーの出身校（中学・高校等）や、日頃つながりのある地域のボランティア団体にも広報した。 両日とも、画面上の全体の司会進行は、学生メンバーが中心となって行い、ブレイクアウトセッションでは、学生メンバーも進行役や記録係として参加し、各グループで出た意見は、タイムリーに Google スライドで全体共有される形をとった。他大学の学生や教職員、一般の方々も参加され、学生や社会人、年齢や学年の壁を越えてバリアについて一緒に考え、ひとつの作品でつながった参加者とともに、感想や意見を直接共有できる貴重な時間となった。 ＜事前ワークショップ＞ パラスポーツと「バリア」について学び・考えるワークショップ ・学生による取材動画の紹介（車椅子バスケットボール見学） ・「しょうがい者スポーツについて」の講義／中村真博氏（埼玉ライオンズマネージャー、本学コミュニティ研究科博士課程後期課程３年） ・ブレイクアウトセッション「パラスポーツとバリア」、発表、まとめ ＜上映会・座談会＞ ・今年の立教大学バリアフリー映画上映会の取り組みについて紹介 ・映画『だれもが愛しいチャンピオン』上映 ・座談会（前半：映画の感想共有、後半：様々なバリアについて考える）
バリアフリー 対応	映画本編日本語字幕付き、手話通訳・文字通訳（上映会プログラムの一部）
参加者数	事前ワークショップ：14 名（＋運営側・学生メンバー24 名、計 38 名） 上映会：24 名（＋運営側・学生メンバー26 名、計 50 名） 座談会：16 名（＋学生メンバー15 名、計 31 名）
参加者の感想	・自分とは異なる視点や意見を聞くことができて、学びが多かった。 ・ステレオタイプな考え方にならないためにはどうすればいいのかということについて、新たな考え方を知ることができ、今後授業での学びにも活かせると思った。 ・（映画の内容にもあったが）人を創るということはとても大切であると同時に難しくもあるが、私自身も教員生活を通じてその一翼をどこかで担うことができるなら、それは幸せな仕事であるということを改めて感じた。
今後に向けて	今年、これまでの上映会と大きく変えたところは、学生組織の変革である。コロナ

	禍において、学生同士の連携が難しいという昨年の課題を踏まえて、今年は従来の学生実行委員会を一度解散し、上映会に関わる学生を新たに募集した。 ６月から、「コロナ禍の中の『バリア』とは何か？」をはじめ、オンラインでできる映画上映会の形や内容について議論を重ね、今年は「バリアフリー対応をするための上映会」ではなく、「バリアについて考える上映会」にすることに決めた。新しい形のスタートで、試行錯誤の連続ではあったが、学生たちが積極的に関わることで、これまでにない２週連続の充実したプログラムとなり、オンラインの良さを十分に活かした内容となった。 今後もwithコロナが続くことが予想されるが、その時々で、どのような形や内容で開催する上映会が望ましいのか、ボランティアセンターがバリアフリー上映会を開催する意義を考え、主催部署として、本イベントの運営について、スタッフ一同協力連携をしながら進めていく必要がある。

（２）バリアフリー映画上映会学生メンバーの活動

テーマ	みんなが楽しくみんなが輝く 違いを愛そう！優しさと勇気を持とう！個性を愛そう！
活動報告	新しく集まった学生メンバー17名で、週に一度の全体ミーティングに加え、活動班ごとも適宜話し合い（すべてオンライン）、映画会のコンセプトや上映作品、プログラム等を決めて準備を進めた。 上映作品の「だれもが愛しいチャンピオン」が知的しょうがい者のバスケットボールチームの葛藤を描いた内容であることから、参加者にその内容をより身近に感じてほしいという思いで、まずは自分たちがパラスポーツへの知見を広めようと、車いすバスケットボールチームの練習を取材見学し、事前ワークショップでその様子を動画で紹介した。オンラインのミーティングのみで、自分たちにできることを模索しながら本番を迎えたが、学生全員の想いがよく反映されたプログラムとなり、学生メンバー自身も本上映会の活動を通じて「バリア・しょうがい」に関する意識が変わったことを実感していた。
今後に向けて	コミュニケーションや進捗管理が課題となった昨年の状況を踏まえ、今年は、ミーティングの際には、事前にワークシートやアンケート等をまとめ、ミーティング後は宿題として期限を決めて対応していくことで、限られた時間を有効に使い、着実に進めるよう心掛けた。 学生たちの積極的な姿勢と興味は尽きることなく、出てくる意見やアイディアの素晴らしさにはいつも感心させられた。上映会終了後もSNSで発信を続けて、活動を記録に残すことで来年にもつなげたいという申し出もあった。スタート時点から丁寧に何度も話し合いを行い、ビジョンを明確化し、共通の目標に向かって活動したことで、結果として、仲間意識や充実感が生まれ、更なるチャレンジにもつながった。当初のワークショップで、「オンライン授業のまま、大学生だけが取り残されている。」と孤独を感じていたそれぞれのメンバーが、この経験を通じて自信を持ち、仲間ができ、居場所になったことは何よりの成果だと考える。今後も、学生とボランティアセンターが共に考え動くことで、上映会を進化させていきたいと思う。

当日の様子

２．各種ボランティア講座、講演会の充実

（１）オンデマンド ボランティアオリエンテーション

開催日時	2021 年３月１日（月）～８月 31 日（火）
開催場所	オンライン（新入生オリエンテーションサイトよりリンク）
内容	毎年４月に、「新入生オリエンテーション行事」の一環として、ボランティアオリエンテーションを開催し、学内のボランティア関連部局の紹介、ボランティアセンターの活用方法、学生ボランティアサークルの紹介などを行っているが、2020 年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止となった。 2021 年度は、当初より、新入生オリエンテーションのオンライン開催の方向性が示されていたので、ボランティアオリエンテーションも、対面で開催していた内容をすべて、ボランティアセンターホームページ内で、オンデマンド形式で配信する方法に変更した。 2020 年９月より、サイト作成をはじめ、学生ボランティアサークルに対しても、各サークルの紹介動画を提供するように依頼し、2021 年２月にサイトが完成した。３月上旬から以下のような構成のサイト情報を新入生に向けて提供を開始し、さらにオリエンテーションが開催されなかった新２年生に対しても、立教時間からの SPIRIT メールを利用して、情報を配信した。 【オンデマンド ボランティア・オリエンテーションサイト】 ①ボランティアセンター紹介 ・ボランティアセンター紹介【動画】 ・ホームページ／SNS／メールマガジン ②ボランティアセンター主催プログラム紹介 ・一貫連携清里環境ボランティアキャンプ【動画】 ・農業体験 in 山形県高畠町【動画】 ・バリアフリー映画上映会【動画】 ・全学共通科目「ボランティア論」 ③関連部署紹介 ・立教サービスラーニングセンター ・陸前高田サテライト（東日本大震災復興支援） ④学生ボランティアサークル紹介 ・学生ボランティアサークル紹介【動画】 ・学生ボランティア団体紹介冊子【PDF】 ・学生ボランティア SNS・ホームページ紹介【HTML】 ⑤オンライン ウェルカム ウィーク告知【PDF】 ⑥アンケート【Google Form】 期間中に延べ 1,571 名が視聴したことになる。 学生ボランティアサークルにも新入部員の加入が見られ、成果を感じることができた。
今後に向けて	対面開催の場合は、池袋・新座でそれぞれ開催する必要があったが、オンデマンド配信にすることにより、新学期からの事務負担は軽減が図れ、また、より多くの新入生に情報を届けることができた。 学生同士の対面での交流の機会が不足しているので、学生部主催の新歓イベントとの共同実施など、制限下でも可能な交流の機会を確保するように準備を行いたい。

（２）Online Welcome Week

開催日時	2021.４.26（月）、４.27（火）、４.28（水）、４.29（木）、４.30（金）、 ５.５（水）、５.６（木）、５.７（金）、５.10(月) 12：30～13：20　（お昼休み）　※オンライン開催 ※2020 年度はオンライン開催 　2019 年度は、各キャンパスに分かれて、それぞれ２回実施 　池袋　2019. ４. 22(火)～４.26(金) ９：00～17：00 　新座　2019. ４. ８(月)～４.12(金) ９：00～17：00
開催場所	オンライン（Zoom による配信）
内容	毎年４月に、「新入生オリエンテーション行事」の一環として、ボランティアオリエンテーションを開催し、学内のボランティア関連部局の紹介、ボランティアセンターの活用方法、学生ボランティアサークルの紹介などを行っていたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響でオンラインプログラムに切り替えとなった昨年度に続き、2021 年度もオンラインで開催した。 昨年度からの変更点は、Google Meet によるストリーミング配信から Zoom に切り替えたこと、また、主な対象を新１年生及び新２年生としたことである。新２年生は、長期間にわたり大学生活をすべてオンラインのまま過ごすことを余儀なくされたこともあり、まだサークルに入っていない学生も多くいる。そのような学生にも声が届くように広報し、参加しやすいように配慮した。 開催日は、各ボランティアサークルの幹部と調整を行い、１回につき２団体を基本とし（一部スケジュール調整の難しいサークルは単独で開催）、９日間にわたり紹介した。各回にボランティアコーディネーター１名と各サークルの代表数名までの構成で、学生によるサークル紹介（パワーポイント・動画の共有）の後、１・２年生からの質問はチャットにて受け付ける形とした。 延べ 120 名（うち、新２年生は４割弱）が参加し、各回とも、当日は、各サークルの活動の魅力、活動をはじめたきっかけ、ボランティアの魅力や社会と関わることへの楽しさなどを直接伝える良い機会となった。 今年度は、キャンパスを越えた入部や２年生でもまだ入部できるかということ、また活動スケジュール等、入部を検討する具体的な質問も毎回のように出て、積極的な姿勢が窺われた。全体的には、教育や環境分野に関心が高い傾向が見られた。 オンラインでの開催は、興味のあるサークルの情報がキャンパスを越えて収集できるというメリットに加えて、自分が興味のあるサークルの説明だけを視聴できる点は、時間節約にもなるという利点をアンケートで挙げた学生もいた。 なお、イベント開催情報は、昨年度と同様に、学内 e ポートフォリオ「立教時間」のイベント掲載ページ、ボランティアセンター専用の SNS（Instagram、Twitter）上で告知し、事前に URL と Google フォーム（事後アンケート）を掲載した。 ＊参加サークル　【カテゴリー】　（当日参加人数） ４.26（月）PRC【国際】、B.S.A 第８支部【総合】（15 名） ４.27（火）Frontiers【復興支援】、Three-S【復興支援】（15 名） ４.28（水）立教大学献血運動の会【総合】、Bambino　【教育】（11 名） ４.29（木）立教大学 YMCA【総合】、RESC（立教大学教育研究会）【教育】（20 名） ４.30（金）アジア寺子屋【国際】、堀の内セツルメント　【教育】（16 名） ５.５（水）手話サークル HandShape【福祉】（９名） ５.６（木）ボランティアパフォーマンスサークル どりぃむ・ぼっくす【福祉】、 　　G.F.S【総合】（８名） ５.７（金）R.S.C.C（海岸清掃サークル）【環境】、 　　REPC（立教エコキャップ推進委員会）【環境】（20 名） ５.10（月）日曜学校さゆり会【教育】（６名）

今後に向けて	昨年度に比べて、キャンパスへの入構制限は緩和されたものの、なかなか学生同士が知り合う機会が少ない中、「Online Welcome Week」の開催は、学生同士、またボランティアセンターと学生をつなぐ一つのきっかけとなった。 新型コロナウイルスの影響で、依然として、長期間にわたり課外活動が制限されてきたことには変わりはなく、自分たちの活動そのものの継続の問題や、新歓活動等において課題は抱えているものの、コロナ禍も２年目となり、その中でも、どのタイミングでどのようなことを発信していったらよいのか、私たちスタッフも学生たちも、昨年度の経験を踏まえて準備を行った。スタッフ・学生ともに、オンラインで行うことにも少しずつ慣れてきて、各回のプログラム構成、当日の進行・記録、動画の再生のタイミングや方法など、以前の振り返りや改善点を反映して円滑に行うことができたように感じている。 サークルの学生たちにとって、自分たちの所属するサークルの活動理念や楽しさ、やりがい等を改めて振り返り、発信する場として非常に有意義な場となった。そして同時に、その生き生きとした姿を見て「ボランティア活動を通していろいろなことを学びたいと思った」という参加者の声も複数あった。 次年度以降も、学生たちの声を参考に、ボランティアに関心のある学生と各ボランティアサークルをつなぐことができるよう支援を行っていきたい。

（３）①オンデマンド 「海外ボランティア講座」

開催日時・場所	ボランティアセンターホームページでのオンデマンド配信
主催 共催	立教大学ボランティアセンター NPO 法人 ICYE ジャパン 認定 NPO 法人 CFF ジャパン（2020 年度より） 特定非営利活動法人 グッド（2020 年度より） 特定非営利活動法人 JHP・学校をつくる会（2020 年度より）
開催内容	昨年度に引き続き、「海外ボランティアや海外ワークキャンプに関心がある」、「海外での経験を今後のキャリアに活かしたい」等の学生を対象にオンデマンドの海外ボランティア講座の配信を開始した。 昨年度掲載した動画も引き続き、視聴できるようにし、内容に充実を図った。2021 年度は、例年利用者が多く、長期の派遣型活動に定評のある、NPO 法人 ICYE ジャパンに制作を依頼し掲載した。
次第	2021 年７月 30 日（金）より、更新された内容は以下の通りとなる。 はじめに ボランティアセンターの説明動画 海外ボランティア主催団体の紹介 ・認定 NPO 法人 CFF ジャパン紹介動画（継続） ・特定非営利活動法人 グッド紹介動画（継続） ・特定非営利活動法人 JHP・学校をつくる会紹介動画（継続） ・NPO 法人 ICYE ジャパン紹介動画（追加） 参加者の体験談 ・2016 年 韓国「日韓交流キャンプ」体験談動画（継続） 2020 年度 ｺﾐｭﾆﾃｨ福祉学部ｺﾐｭﾆﾃｨ政策学科４年次 長壁 唯 ・2019 年ミャンマー 「ミャンマースタディーツアー」体験談動画（継続） 2020 年度 文学部文学科（文芸・思想専修） ４年次 清水 綾乃 ・2020 年マレーシア 「マレーシアワークキャンプ」体験談動画（継続） 2020 年度 現代心理学部心理学科３年次 高橋 歩実 ・2019 年カンボジア 「カンボジア体験ボランティア」体験談動画（継続） 2020 年度 経営学部経営学科２年次 佐藤 花凛 ・2019 年デンマーク 「長期国際ボランティア」体験談動画（追加） 2019 年度 法学部政治学科４年次 赤松 加寿代 質問・問合せ
今後に向けて	国内における対面活動の再開、条件付きでの宿泊を伴うボランティア活動についても、緩和されつつある。 海外渡航制限については、留学の再開により一定の見通しも可能となったが、海外ボランティアの活動先については、未だ予断を許さない状況でもある。今後も、海外ボランティア主催団体の活動紹介を継続し、また、同団体が主催する国内ワークキャンプなどの情報の発信についても、学内の制限レベルを勘案しながら、検討していきたいと思う。

３．学生活動支援

（１）ボランティアサークル

ボランティア・プレサミット

開催日時	第１回：2021.６.24（木）　12:35～13:20　※オンライン開催
開催場所	オンライン（Zoom によるミーティング形式）
参加者	【プレサミット参加団体】　計 17 団体、17 名 １．R.S.C.C（Rikkyo Sea Cleanig Circle） ２．REPC（立教エコキャップ推進委員会） ３．日曜学校さゆり会　４．堀の内セツルメント（立教大学子ども会） ５．RESC（立教教育研究会）　６．PRC(Philippines Relationship Circle) ７．東日本大震災復興支援団体 Frontiers　８．B.S.A.第８支部 ９．立教大学 G.F.S　10. 立教 YMCA　11. 献血運動の会 12. 子どもクラブ Bambino　13. 手話サークル Hand Shape 14. アジア寺子屋　15. ボランティア・パフォーマンスサークルどりぃむ・ぼっくす 16. 東日本大震災復興支援団体 Three-S　17. SEMBRAR
内容	１．開会のあいさつ 　プレサミットの主旨・ねらいの説明 ２．学生ボランティアサークルの現状報告・情報共有（１団体約１分程度） 　・事前アンケートの結果内容を共有 ３．６/20 以降(緊急事態宣言解除後)のボランティア(課外)活動について 　・夏休みの活動について 　・コロナ感染対策の留意点と大学への事前事後連絡について 　・ボランティア保険について ４．ハラスメント啓発について ５．チャット機能について ６．その他（ボランティアセンターからの連絡事項など） 　・秋以降のスケジュールの提示 昨年度と同様に、参加メンバーの取りまとめや各サークルの状況については、事前アンケートとして Google フォームで集約し、抜粋した内容を事前に参加者にメールで共有し、資料に目を通したうえで参加してもらうことで、時間を効率的に使うことのできるよう準備した。
所感	今年度もオンラインの利点を活用し、キャンパスを越えて一度により多くの情報共有ができた。このプレサミットで他のサークルの取り組みを聞くことで、後日、別途サークル同士でミーティングを設ける機会があったが、オンラインでの活動の詳しい内容を聞き参考にすることで、他のサークルの活動も動き出したケースがあった。学生にとって、サークル同士で直接連絡を取り合うことはハードルが高く感じているようでもあり、ボランティアセンターが積極的に声をかけ、学生をつないでいくことの大切さを改めて感じた。

開催日時	第２回：2021.10.6（水）　12:35～13:20　※オンライン開催
開催場所	オンライン（Zoom によるミーティング形式）
参加者	【プレサミット参加団体】　計 17 団体、18 名（一部２名参加あり） １．R.S.C.C（Rikkyo Sea Cleanig Circle）　２．REPC（立教エコキャップ推進委員会） ３．日曜学校さゆり会　４．堀の内セツルメント（立教大学子ども会） ５．RESC（立教教育研究会）　６．PRC(Philippines Relationship Circle) ７．東日本大震災復興支援団体 Frontiers　８．B.S.A.第８支部 ９．立教大学 G.F.S　10. 立教 YMCA　11. 献血運動の会

	12. 子どもクラブ Bambino　13. 手話サークル Hand Shape 14. アジア寺子屋　15. ボランティア・パフォーマンスサークル どりぃむ・ぼっくす 16. 東日本大震災復興支援団体 Three-S　17. SEMBRAR
内容	１．開会のあいさつ 　プレサミットの主旨・ねらいの説明 ２．緊急事態宣言解除後のボランティア活動（制限レベルに応じた対応）について 　・10/４～レベル２、10/18～レベル１に緩和。対面活動は可能になる。 　＜以下注意＞ 　・活動に関する事前相談 　・宿泊、会食禁止、感染予防対策、連絡先・行動履歴を把握 　・活動先との十分なコミュニケーション、保護者の同意 ３．学生ボランティアサークルの現状報告・情報共有（１団体約１分程度） 　・事前アンケートの結果内容を共有 ４．ボランティアセンターからの連絡事項 　・代交代後の連絡 ５．ボランティアセンター課長よりあいさつ
所感	緊急事態宣言解除に伴い、課外活動制限レベルも緩和され、対面でのボランティア活動も可能となることを受け、学生たちも希望を持てた様子であった。制限レベル２と１では、事前事後の連絡先・行動履歴の申請方法が変わるため、今回のサミットでは、その違いについて詳しく説明した。なお、ボランティア活動は相手先もある活動であるため、活動をする際には、必ずボランティアセンターにその都度、内容を相談することになっている。

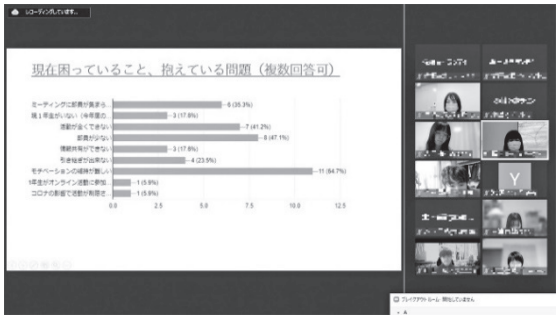
開催日時	第３回：2021.12.16（水）　12:35～13:20　※オンライン開催
開催場所	オンライン（Zoom によるミーティング形式）
参加者	【プレサミット参加団体】　計 16 団体、20 名（一部２名参加あり） １．R.S.C.C（Rikkyo Sea Cleanig Circle）　２．REPC（立教エコキャップ推進委員会） ３．日曜学校さゆり会　４．RESC（立教教育研究会） ５．PRC(Philippines Relationship Circle) ６．東日本大震災復興支援団体 Frontiers　７．B.S.A.第８支部 ８．立教大学 G.F.S　９．立教 YMCA　10. 献血運動の会 11. 子どもクラブ Bambino　12. 手話サークル Hand Shape 13. アジア寺子屋　14. ボランティア・パフォーマンスサークル どりぃむ・ぼっくす 15. 東日本大震災復興支援団体 Three-S　16. SEMBRAR ※上記ボランティアサークルの他、学生保険委員会が参加
内容	１．開会のあいさつ 　プレサミットの主旨・ねらいの説明 ２．学生ボランティアサークルの現状報告・情報共有（１団体約１分程度） 　・事前アンケートの結果内容を共有 ３．ボランティアセンターからの連絡事項 　・代交代後の連絡 　・コロナ禍における活動の留意点について 　・ハラスメントについて 　・ボランティア保険について ４．オンデマンドボランティアオリエンテーションについて 　・2022 年 4 月の新入生向けオリエンテーションサイトの説明および準備・提出物 ５．災害救援ボランティア講座について

所感	日頃から、ボランティアセンターの活用やサークル同士のつながりを繰り返し呼びかけることで、サークルの活動再開に向けて、学生からの相談も増えた。ただ、積極的に動き出している団体と、再開に向けてまだ動き出せない団体との差も見られるため、細かくフォローしながら、個別に対応していきたいと思う。

Zoom メインルームの様子

ボランティアサミット

開催日時	2022.３.８（火）　9:30～12:30
開催場所	オンライン（Zoom によるミーティング形式）
参加者	【サミット参加団体】　計 16 団体、32 名 １．R.S.C.C（Rikkyo Sea Cleanig Circle）　２．REPC（立教エコキャップ推進委員会） ３．日曜学校さゆり会　４．堀の内セツルメント（立教大学子ども会） ５．RESC（立教教育研究会）　６．PRC(Philippines Relationship Circle) ７．東日本大震災復興支援団体 Frontiers ８．立教大学 G.F.S　９．立教 YMCA　10．献血運動の会 11．子どもクラブ Bambino　12．手話サークル Hand Shape 13．ボランティア・パフォーマンスサークル どりぃむ・ぼっくす 14．アジア寺子屋 15．東日本大震災復興支援団体 Three-S　16．SEMBRAR
内容	・ボランティアサミットの意義を理解する。 ・各団体課題の共有と取り組みについての情報交換 ・ボランティアセンターの活用法 ・ハラスメントについての理解 ・グループセッション（活動の現状、SNS の活用法、オンラインで試してみたいこと等について） ・新歓活動（2022 年度オンデマンドボランティアオリエンテーション・WelcomeWeek 開催）に向けての具体的な検討



ボランティアサミットの様子

（２）学生サポーター

テーマ	学生サポーターとは、ボランティアセンターの職員と協働し「立教大学のボランティア活動の活性化」を目的として本年度より活動を始めた。ボランティアセンターのイベント企画や運営に、学生の声を反映させ、学生が主体的に関わることで、より学生のニーズを取り入れた学生支援を目指す。 また新型コロナウイルス感染拡大により、大学生はオンライン授業が中心となり、学生同士の繋がりが一層希薄になっている。それに伴い、学生たちは「人と関わる場」「気軽に話し合える居場所」を求めている。 こうした状況を鑑み、学生とボランティアの活動先を繋げるだけでなく、学生同士を支え合う仕組みづくりの必然性を感じ、学生による学生支援の形としてサポーター制度を導入した。
活動報告	今年度は４年生３名、２年生２名、１年生２名の合計７名で活動をスタートさせた。ボランティアの活動経験者や、ボランティアに興味のある学生を中心に意欲的に活動に参加している。 〇定期ミーティング おおむね週１回昼休みにオンラインで開催。オンラインボラカフェの企画準備のための話し合いが中心であるが、学生サポーター同士が繋がりを深めるために、自分の関心のあることを共有し合う場にもなった。 〇夏休みの研修 当初対面での実施を予定していたが、コロナウイルス感染拡大の影響によりオンラインで実施。 2021.８.４（水）、2021.９.１（水）13：00～16：00　　２日間開催 〈内容〉 ・学生サポーターの活動の主旨、年間スケジュールの確認。 ・活動にあたっての留意点の確認 ・４年生によるボランティア経験のプレゼンテーション ・秋学期の企画の準備 〇イベントの企画・実施 秋学期に Online Volu-Cafe を２回開催した。 学生サポーターは２つのグループに分かれて、ポスターの作成、テーマの設定から主体的に準備し、司会進行も学生サポーターが担当した。 ２月にボランティア経験のある卒業生へのインタビューをまとめる予定。
今後に向けて	今年度から始まった学生サポーター制度は、ボランティアセンターに頻繁に来訪していた学生や、ボランティア活動に非常に関心意欲の高い学生にコーディネーターが直接声をかけて集まった。 次年度からはどのように学生を募集するのかも検討する必要がある。 学生サポーターからは「ボランティアに対する『敷居』を低くしたい」「ボランティアセンターを知らない学生に、自分たちの活動を知ってもらいたい」という声が上がっている。これらの意見をどのように次年度の活動につなげていくのかが課題である。また、今年度も対面での活動ができず、学生サポーター同士も全員直接会う機会がなかった。今後もオンラインでのミーティングやプログラムが中心となることが予想されるが、どういう工夫が必要か話し合う必要がある。学生サポーター同士が縦・横でしっかり繋がりを深めることも肝要であり、ボランティア経験者が卒業する次年度以降、新たなメンバーをどのように募るのかも検討課題である。

（３）Online Volu-Café

開催日時	【第１回】2021.10.26　（火） 【第２回】2021.11.５　（金） 12:35～13:20（昼休み）　※全２回
開催場所	オンライン（Zoom によるミーティング形式）
参加者数	【第１回】参加者５名、学生サポーター３名 【第２回】参加者１名、学生サポーター３名
内容	例年のボランティア・カフェは、それぞれのキャンパスでテーマやゲスト学生を決めてボランティアセンターや会議室などで開催していたが、今年度は昨年に引き続きすべてオンラインでの開催となった。また、６月から新たに導入された学生サポーターが中心となり、企画・運営を担った。 今年は「オンライン中心の大学生活の中で、人とのつながりについて考え意見交換をしよう」というテーマで秋学期に２回にわたり開催した。 テーマの選定にあたり、夏から学生サポーターとコーディネーターが話し合いを重ねた。そこで、例年のような「経験者からボランティア活動の魅力を伝える」という形態ではなく、参加者とも双方向的なやりとりがしたいという意見が出たことから、「想いを共有する場」としての新しい形を考えた。 Online Volu-Café は 45 分という時間の制約もあり、どのように進行していくか、学生サポーターはかなり試行錯誤して準備を進めた。４年生からのアドバイスを参考に、１・２年生のメンバーが意欲的に活動していた。 また、どうしたら多くの学生に関心を持ってもらえるか、ポスターの作成などに工夫を凝らし、テーマの文章一言一句にこだわり話し合いを重ねた。 この過程こそが、学生サポーターにとっての学びの場になっていたようである。 〈主な内容〉 【第１回】 「あなたのモヤモヤ、シェアしてみませんか？」 コロナ禍で思い描いた大学生活ができず、毎日がもの足りなく不安感を抱えている学生たちと、学生サポーターが思いを共有する。 【第２回】 「もしコロナがなかったら、やってみたかったこと～あなたの‘ポジティブイメージ’話し合いませんか～」 コロナがなかったらチャレンジしてみたかったこと、大学生活で期待していた夢などを互いに話し合う。
所感	今年から学生サポーターが企画の段階から主体的に関わり、コロナ禍の今だからこそ学生が抱えている思いに寄り添う形で実施した。 参加者の人数は多くなく、広報については課題が残る。キャンパスに学生がいない状態でのプログラムの周知は SNS や大学のポータルサイト経由に絞られるが SNS の運営方法についても検討の余地がある。 少人数での開催となったが、参加者からは「自分だけが取り残されているような感覚でいたが、同じ悩みを抱えている人がいるとわかり安心した」「孤独感を共有できて、心が軽くなった」という反応があり、運営を担った学生サポーターも達成感を感じたようである。 今までのゲスト学生のプレゼンテーション型のボラカフェの形式は、対面では十分効果があったが、オンラインでの交流となると、より双方向参加型にする工夫が必要だと感じた。

（４）ボランティア活動報告書～TOKYO2020～

	立教大学オリンピック・パラリンピックプロジェクト本部 立教大学ボランティアセンター
内容	新型コロナウイルス感染拡大により、2020 年夏に開催が予定されていたオリンピック・パラリンピック東京大会は延期となった。 立教大学も、大会に多くの大学関係者が参加することなどを勘案し、授業スケジュールの調整なども行い準備した。 延期となった 2021 年度は、感染状況などを勘案しながら、授業スケジュールは例年通りとしたが、開催されることを前提に様々な準備を行い、そのひとつが、大会・準備に参加するボランティアに対する、「授業欠席配慮」、「追試験受験等の教務上の特別措置」の実施となる。 多くの立教生が、実際は大会ボランティア活動に参加していることが予想されるが、ボランティア活動の自主・自発性を尊重し、参加者の正確な把握は行っていない。今回は、主にこの教務上の特別措置の対象となった学生を対象に、活動報告書の作成を呼びかけた。 貴重な体験を多くの人に知ってもらい、また学内で共有することによって、今後の活動に際しての資料として活かしていくことを目的としている。 また、コロナ禍での大会開催に様々な意見があり、すべての人が開催を歓迎する状況ではなかった。また、活動先も異なり、ボランティアに参加する学生間の連携も思うようにならなかったという反省もある。それらを踏まえ、参加者の想いを参加者の間でも共有することも、作成の大切な目的としている。今後、参加した学生間でのネットワーク形成なども期待したい。 教務上の特別措置対象者　15 名 事後アンケート回答者　７名 大会への参加状況　参加できた　５名 参加できなかった　２名 活動報告書作成希望者　４名

＊『ボランティア活動報告書～TOKYO2020～』より抜粋
本報告書は、等身大のありのままの想いを伝え、記録する趣旨で作成している。

東京オリンピック・パラリンピックプロジェクト座長
安松　幹展

東京オリンピック・パラリンピックにボランティアとして参加された学生の皆さん、ボランティア活動お疲れ様でした。今回、ボランティアに参加された皆さんは、性別や年齢、しょうがいなどといった様々な枠組みを超えて、多くの方々と交流する機会にもなったと思います。また、世界各国から集ったトップアスリートをサポートする立場として、多くの学びを得る機会でもあったかと思います。

私が座長を務める「東京オリンピック・パラリンピックプロジェクト」は、社会貢献活動を推進し、本学の教育・研究活動を活性化することを目的として設立されました。皆さんのボランティアとしてのご活躍は、まさに本プロジェクトが掲げる「社会貢献活動」を体現されたと同時に、立教大学の今後のボランティア活動を推進していくエネルギーでもあったと考えています。今回の貴重な経験を、これからの学生生活、そして今後の人生にもつなげていっていただければ幸いです。

ボランティアセンター長
首藤　若菜

東京オリンピック・パラリンピックは、当初 2020 年夏に予定されていました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、1 年延期となり、2021 年夏に無観客で開催されることになりました。開催にあたっては、様々な混乱が予想され、開催に関する賛否も盛んに論じられました。

そうしたなか、多くの方々がボランティアとして大会に関わり、大会運営を支えてくだいました。ボランティアの方々の活躍は、国内外の選手・関係者から高い賞賛を得ました。

立教大学の学生のなかにも、ボランティアとして大会に参加された方がいます。コロナ禍でのボランティア活動は、ご苦労が多かったことと思います。オリンピック・パラリンピックという世界の舞台に関わり、多様な人々と触れ合うことで、様々な刺激を受け、視野が広がった感じた人も多かったようです。この経験を糧に、残りの学生生活をますます充実させてくださることを願っております。

本報告書は、そうした貴重な経験をより多くの方に共有するために刊行されます。ボランティア活動を考え、取り組むきっかけにしていただければ嬉しく思います。

４．国内キャンプの主催、プログラム開発

(1) 一貫連携教育・立教学院清里環境ボランティアキャンプ

＜実施概要＞

開催日時	８月中旬　２泊３日
開催場所	山梨県北杜市高根町清里、公益財団法人キープ協会　キープ清里キャンプ場
主催 共催	学校法人立教学院、立教大学ボランティアセンター 公益財団法人キープ協会
内容	立教学院の一貫連携教育の目標の一つである「共に生きる力を育てる」をテーマに、①自然から学び自然と共に生きる方法を学ぶこと、②環境問題に関心を寄せ、その環境を守るために力を合わせること、③年齢や学校が違う参加者が共に参加して理解を深めあうことを目指し、立教学院の児童・生徒・学生・教職員が清里の地に一堂に会し、キャンプ開始以来、活動の柱としてきた環境整備に関わるボランティア活動を行う。 【主なプログラム】 ８月中旬（１日目）開会礼拝、オリエンテーション、ポール・ラッシュ記念館の見学、目標・役割づくり ８月中旬（２日目）環境整備ボランティア活動、レクリエーション、高校生と大学生の交流会 ８月中旬（３日目）振り返りシート作成、閉会礼拝
参加者数 ＊2019 年度	小学校：32 名、池袋中：７名、池袋高：４名、新座中：３名、新座高：３名、大学：12 名、各学校スタッフ：９名、合計 70 名

＜2022 年度実施計画＞（2022 年１月末日時点）

開催日時	８月中旬　２泊３日
開催場所	山梨県北杜市高根町清里、公益財団法人キープ協会　キープ自然学校
主催 共催	学校法人立教学院、立教大学ボランティアセンター 公益財団法人キープ協会
内容	昨年に引き続き、2021 年度も中止となったが、2022 年度の再開に向けて、2021 年６月より準備を開始した。 立教学院長、立教大学総長に 2022 年度の実施方針を確認し、感染状況次第ではあるが、対面実施ができるように必要な感染対策を行った実施案を計画し、直近の感染状況に応じて催行判断ができるように準備することとなった。 例年キャンプ場で実施していたが、宿泊施設として十分な感染対策が取れないことが判り、別の施設に変更を行い、また部屋の利用人数を半減するなどの感染対策を取ることとなった。 特に、ワクチン接種が義務付けられない状況のなか、小学生も参加するというプログラムであるため、健康観察アプリの使用、事前 PCR 検査の実施、現地発症に備え、救援者費用の補償を受けられる保険に加入するなどの実施案を策定し、立教学院関係各校が参加する教学常務会にて確認した。 今後、実施判断の基準をまとめたガイドラインなど、修学旅行実務で準備されている資料を元に作成を行い、安心・安全に実施できるように準備を進めていくこととなる。
参加予定数 ＊2022 年度	小学校：27 名、池袋中高（池袋・新座）：11 名、大学：８名、各学校スタッフ：９名、合計 55 名

（２）夏季フィールドワーク、農業体験 in 山形県高畠町

＜実施概要＞

開催日時	９月上旬　５泊６日
開催場所	山形県東置賜郡高畠町和田民俗資料館、ゆうきの里・さんさん
共催	上和田有機米生産組合
内容	【事前学習】 第１回（７月）は、参加学生の交流を深めることと、「高畠」という地での経験を前に何に向き合うか、各自の目的をしっかり意識するための研修を行う。次回の研修会に向けて、各グループ毎にテーマを分担。 第２回（８月）は、それぞれが持つ学びの意識を支え合うため、社会連携教育課課長より「高畠と立教大学がともに紡いできたもの」というテーマで講話。その他、参加者それぞれの参加動機を共有し、互いに支えあう関係づくりを行う。 【現地プログラム】 １日目　援農、渡部宗雄組合長による講演 「上和田有機米生産組合の歴史と未来」、ふりかえり ２日目　援農、組合青年部との交流「高畠で農とともに生きる」、 ふりかえり ３日目　援農先で民泊１日目、ふりかえり ４日目　援農先で民泊２日目 立教卒業生との交流「人生の選択」、ふりかえり ５日目　援農、発表会、交流会、ふりかえり ６日目　菊池良一氏によるそば打ち体験 【事後学習】 10 月の事後研修会では、ふりかえり集を配布し、それぞれの参加動機（目標）に立ち返りながら、学びを深める。
参加者数 ＊2019 年度	15 名（男６名・女９名）、スタッフ３名

＜代替企画＞上和田有機米農業組合×農業体験参加学生　オンライン座談会

開催日時	2021 年 11 月 20 日（土）
開催方法	Zoom によるオンライン開催
共催	上和田有機米生産組合
内容	新型コロナウイルス感染拡大により２年連続「農業体験」が中止となったが、参加学生（卒業生）と上和田有機米生産組合の皆さんが繋がり続けるため、オンラインでの座談会を開催。 冒頭で青年部の皆様制作のメッセージ動画を流し、農業体験での日々を想起し、コロナ禍を経て人と繋がることの大切さに思いを巡らした。 座談会では３人ずつのグループに分かれ、大学生活のこと、食事への意識の変化、農業のことや今年の新米のことなどを自由に話しながら、交流を深めた。 短い時間ではあったが、双方にとって非常に有意義な機会となった。
参加者数	上和田有機米生産組合９名・2018 年度 2019 年度農業体験参加学生および卒業生９名、ボランティアコーディネーター１名　合計 19 名

【参加学生・卒業生の感想】

・コロナ禍では、人と繋がることが困難に感じてしまいがちです。今回の座談会であらためて農業体験での、人との繋がりや経験の大きさを実感し、心強く感じました。立教生も含め、住んでいる所も、進路や仕事も異なりますが、繋がりを大切にしたい、と思える方々に出会えたことに感謝しています。

・農業体験の記憶を振り返るとともに、自分自身、この四年間でどのように成長したか、歩んできたか、考え直すきっかけになりました。自分はやっぱり自然が好きだし、人とコミュニケーションを取りながら作業を進めていくことに楽しさを覚えることを実感しました。農業体験が、自分自身の大学生活の大きな軸となっていることは確かです。この経験を卒業後もいかしていきたいと思っています。

・コロナという大きな壁が立教と高畠を隔ててしまって２年ほど。これから色んな意味において人との関わり方が変化していくだろうと思います。自分の知っているものが消えていくことを受け入れる必要性を感じると共に、逆に自分から歩み寄る必要性というのも感じました。今回、その歩み寄りがなければこの座談会は開催できなかったはずです。繋がりたいと思う気持ちと行動さえ有れば、この関係は途切れることはなく続いていくのだと思います。

オンライン座談会での交流の様子

５．その他のプログラム

（１）立教サービスラーニングセンター（RSL）・ボランティアセンター協同企画

開催日時	2022．３．３（木）　13:00～15:00
開催場所	オンライン（Zoomによるミーティング形式）
主催	立教サービスラーニングセンター（RSL） 立教大学ボランティアセンター
タイトル	立教サービスラーニングセンター・ボランティアセンター協同企画 公開講演会「学生ができる社会活動（入門編） ―池袋地域の学習支援事業の実際を知ろう！―」
開催の経緯	立教大学では、社会連携教育に関して、正課教育としては、立教サービスラーニングセンターが、正課外教育としては、ボランティアセンターが担当し、相互協力連携しながら、同じ課の中で活動してきた。今回は、その相互の知見を活用し、学生の正課教育と正課外教育の学びの往還が促進することを意図し、今年度、初めての協同企画を実施した。 子どもに関わることや学習支援は、ボランティア活動の中でも、本学の学生の関心および参加実績の高い分野である。また、立教サービスラーニングセンターにおいても、相対的貧困・学習支援をテーマとする授業「RSL-コミュニティ(埼玉)」や池袋地域における多文化共生を主題とする「RSL-コミュニティ(池袋)」が開講されていることから、社会連携教育課の共同企画としてこのテーマを取り上げることとした。 本企画を通じて、キャンパスのある地域の社会的課題を認識し、学生自身がどのように関わることができるかを考え行動するきっかけにつながるよう、地域の社会的課題に取り組む団体の方を講師にお迎えした。活動の現場において大学生が担っている役割についても、事例を踏まえてお話しいただき、講義後に意見交換の場を設ける。 なお、新型コロナウイルスの感染状況に左右されることなく、確実に実施できる形式を重視し、オンラインでの開催とした。
参加者	参加者 18 名 本学学生・大学院生・教職員（学内システム「立教時間」および両センターの SNS やメールマガジン等で募集） ※特に、上記「RSL-コミュニティ(埼玉)」「RSL-コミュニティ(池袋)」履修学生、および、日常的にボランティアセンターとつながりのあるボランティアサークル（学習支援を行っている団体の学生）等、本テーマに特に関心の高いと思われる学生には、別途メール等で直接呼び掛けた。
内容	１．講義 ＜講師＞ 松宮徹郎氏（池袋市民法律事務所・弁護士、子どもサポーターズとしま学習支援会「クローバー」、NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク理事） ＜講義内容＞ ・無料学習教室設立に関わる経緯、弁護士の視点からみえる池袋地域の課題等の具体的な事例 ・活動において、大学生が担う役割（課題や可能性を含む） ２．セッション（ブレイクアウトルーム） ３．ゲストスピーカーからのコメント、質疑応答

	４．サービスラーニングセンター・ボランティアセンターの紹介
今後に向けて	プログラムを立案する際に、両センターの大切にしていることや特色、また、日頃関わる学生の傾向を踏まえて、社会的課題に学生自身がどのように関わることができるかを考えるというプロセスを重視したプログラムデザインにすることを意識した。そして、ボランティアに関心をもつ学生だけでなく、「何かを始めたい(けれど、どんな選択肢があるのかわからない)。」「なにか大学生らしいことをしたい。」等の漠然とした思いを抱いている学生たちに、社会連携教育課の協同企画としてどのようなことができるか、何度も話し合った。 オンライン上という限られた空間と時間の中で、運営スタッフを含めた参加者全体が顔のみえる関係で開催することを重視するか、それとも、セッションをグループワーク形式に変更し、人数を拡大するか等、人数についても協議を重ねたが、結果として、今回のような形で開催することが決定した。学生の正課教育と正課外教育の学びの往還を促す初めての協同企画は、参加者の声からも、非常に有意義なものであったことがわかる。 来年度以降も、年１回の企画、または春・秋と分けて年２回として実施することや、テーマについても、各回１テーマを設定して、シリーズ化するという案も出た。対面が可能な状況になれば、対面での開催も検討し、今後も引き続き、正課教育と正課外教育の学びの往還を促進するような両センターの協同企画が、学生の認知度向上やセンター活用への「一歩」につながることを期待する。

オンライン講義の様子

（２）災害救援ボランティア講座

開催日時	2022. ２.19（土）、２.26（土）、３．５（土） 各日 9:00～17:00
開催場所	池袋キャンパス 14 号館 D301 教室、 ポールラッシュ・アスレティックセンター、池袋防災館
主催 協力	立教大学ボランティアセンター 災害救援ボランティア推進委員会、 一般社団法人　防災教育普及会、公益財団法人 日本法制学会
講師	総務省消防庁 OB、東京防災救急協会等
内容	2020 年度は中止となったが、2021 年度は、以下の予定で実施した。 制限レベル１、２においては、対面実施。制限レベル３以上の場合は、オンライン開催として予定された。 震災時において、本講座修了生による自発的な活動を期待し、参加費用を立教大学が負担する措置もなされている。 今後、マニュアルを配布するなど、緩やかな組織化も検討していく予定である。 ２.19（土）災害救援ボランティアの基本、災害ボランティア活動ケースワークほか ２.26（土）応急手当活動（上級救命講習） ３．５（土）災害模擬体験と実技、大学・学生・地域による復興支援と防災活動、災害ボランティア活動の安全衛生と図上演習 ※２.19 と３．５はオンラインで実施。２.26 のみ、実技講習は対面で実施した。
参加者数	本学学生 15 名、本学教職員１名、　一般・他大生３名

Ⅵ. 講演会・座談会

今年度は、今期で任期満了となるスタッフの経験と想いを、次の世代に引き継いでいくための、連続研修会を開催したので、その講演会・座談会記録の要約を掲載する。なお、書面の都合上、スタッフ間の意見交換部分は割愛してある。

茅 芙美氏 講演会

『ボランティアコーディネーターとしての５年間を振り返って』
～大学で正課外教育に関わる意味～

日　時：2021 年 11 月８日（月）10：00～11：00
場　所：オンライン開催 Zoom 使用
講　師：茅 芙美（社会連携教育課、ボランティアコーディネーター）
参加者：佐藤 一宏、阪下 利哉、廣瀬 かおり、小幡 彩子、増田 由紀、
　　福原　 充、大森 真穂、高山 智大、三浦 圭介、結城 俊哉

「ボランティアコーディネーターとはどんな仕事で、どんな役割があるのか。」
私はこのことを心の片隅に置きながら５年間、業務に携わってきました。私たちの仕事にいわゆる典型的な「マニュアル」はありません。

教員ではないけれども、ただの事務職でもない。中途半端な立場だと感じる瞬間もありましたし、どんな立ち位置で学生と接するべきなのか、今もなお考え続けています。
ただ、この問いを常に心の中にお守りのようにぶら下げておくことが、私にはコーディネーターの姿勢として、とても重要だと思っていました。
任期中はボランティアについて四六時中考えていましたが、またボランティアを切り口に、むしろ私自身が人の生き方、人の成長、社会とのかかわり方を学べたように思います。
齢四十を超えて大学生活をある意味「追体験」し、学び直しができたのも、学生たちとふれ合うこの場があったからこそです。
カウンター越しに話を聞いた学生たち、プログラムを通して関わった学生たち一人ひとりの顔を思い出しながら今は感謝でいっぱいです。

立教大学で働き始めた初日、数日前まで小学生の教員であった私は、大学生を目の前に戸惑うことばかりでした。そんなときに前コーディネーターの関口さんがこう声をかけてくださいました。
「ここに来る学生はみんな真面目に生きて考えて悩んでいる。だからこそ、人の役に立ちたいと思ってボランティアセンターに来るの」。この言葉は今も忘れられずに心に残っています。
私には、キャンパス内の学生たちはみんなキラキラ輝いて見えました。首都圏の大学生は華やかで、悩み事とは無縁なのだろうと思っていました。ですから関口さんの言葉はにわかには信じがたかったのです。しかし、日が経つにつれてその言葉の意味がだんだんよく分かってきました。

「〇〇に見える」という思い込みはとても怖いことで、人間は多面体のようなもの、私から見えている部分はごく一部に過ぎなかったのですね。大学生も小学生も同じじゃないか、みんな成長段階に応じて

悩んだり、もがいたり、笑ったり、泣いたり、失敗したりしながら成長していくのだと気づいたときに、少し気持ちが楽になりました。

関口さんはまた、「いろいろな学生がいるけれど、どんな学生もみんな愛おしい」とも仰いました。「愛おしい」というのはすごい言葉ですよね。人に関心を持って、どれだけ真摯に向き合っていけるかという一つのバロメーターのようだと思います。どれだけ相手のことを真剣に考えられるか。それを私はここの仕事でやらなければならない、学生の人生に少しでもかかわる以上は常に学生を「愛おしい」と思って仕事をしていこうと決意しました。

初日について思い出すことがもう一つあります。佐藤課長がボランティアガイドをお持ちになって机の上に開かれたのですね。そこに書いてあったのが、「共に生きる」という言葉でした。課長は何もおっしゃいませんでしたが、この言葉についてしっかり考えてくださいと言われた気がしました。その日は帰った後もガイドを前に考え込んだことを今でも覚えています。

人はもちろん一人では生きられない。それは分かっている。でも、二十歳前後の若い大学生たちに、私はそれをどう伝えていけばいいのだろう。

悩み続けていたある日、大学の廊下で清掃の方がゴミを分別しているのを見かけました。丁寧にゴミを分別している傍ら、まるでその方がいないかのように無造作にゴミを投げていく学生が何人もいました。私はその光景に衝撃を受けました。小学校では、給食のストローと紙パックでさえ分別しないと叱られます。その数年後に大学生はどうしてこうなってしまうのか。他人が見えないのかな…そんな学生たちに「共に生きる」という言葉をどうアプローチをしていけばいいのだろう。悩みはさらに深まりました。

私は、実は最初から教育に関心があったわけでも、卒業後すぐに教員になったわけでもありません。むしろ大学の時には「先生には絶対になるまい」と思っていました。紆余曲折がありこうして教育現場で仕事をしておりますが、人生を遠回りした分、見えてきた景色もあります。

一つ言えるのは、人との関係において一番怖いのが「無関心」だということです。人を無視することは暴力よりも恐ろしい。ただ、残念ながら、世の中に対して、また他者について無関心な若者は増えています。このコロナ禍ではより、若者に限らず自分以外はモノのように感じている人もとても多くなってきているように感じています。

ボランティアで社会と向き合うときは、否が応でもいろいろな人と向き合わなければなりません。ときには嫌な思いもします。現場に行ったからといって、達成感や答えをすぐに得られるわけでもない。今はとても便利な時代で、スマホで「ググれ」ばさまざまなことが瞬時に分かりますよね。でも、スマホでググれない何かが見つかるのが「現場」なのです。そしてもしかしたら、答えはすぐ得られずに、５年、10年後にハッとすることにつながるかもしれない。そんな助け合って生きていく「種まき」こそがボランティアなのだと思います。

立教にはそんな体験ができる場を正課、正課外教育の両輪で支えてきた歴史があります。ボランティアは後者のプログラムで、活動の現場に参加し、体験を通して学ぶことと定義されています。立教の正課外教育で本当に素晴らしいのは、全てを職員と教員が一緒に協働して企画、運営してきたことです。学生と職員の距離が本当に近いということは、学生にとって非常に意味のあることだと思います。そしてボランティアセンターには長年にわたり継続して

きたプログラムがいくつかあります。

その中で私が印象深かったのは、高畠農業体験とバリアフリー映画上映会です。農業体験では６日間、学生と現地で共同生活を送ります。朝起こすところから始まって、常に睡眠不足で気の休まる時はなく、毎日が戦いです。それでも高畠の人の温かさと土の匂い、学生が朝から晩まで汗まみれで慣れない農作業に懸命に取り組む姿が励みになりました。何よりの喜びは、学生の表情がみるみる変わっていく様子を間近で見られることです。夜のふりかえりの時間で日に日に学生の言葉が厚みを増していくのですね。通り一遍の感想ではなく、胸の底からこみ上げてくるような話を聞くことができます。

人が学ぶ場所は大学のキャンパスや教室に限らないという、実は当たり前のことを改めて学生たちに教えてもらった気がします。バリアフリー映画上映会には５年間ずっとかかわってきましたが、個性豊かな学生が多く、一つの目標に向かうまでに動きが止まってしまったり、ミーティングに来なくなる学生がいたりして、葛藤も悩みも山ほどありました。

そんな苦労も上映会当日、学生の表情がガラッと変わった瞬間に吹き飛んでしまいます。特にコロナ禍にあっては、「バリア」「壁」というものに関心がある学生が集まってきました。みんな社会に対して違和感を持ち、共に生きたい、生きてみたいと渇望しつつ、機会を奪われているのだなと、話を交わすなかで感じました。今年は例年に増して試行錯誤の一年でした。ワークショップも手探りの状態で始まりましたが、学生とのやりとりで私たちも学ぶところがありました。

プログラムに関わる中で考えさせられたのは、学生との距離の取り方です。手を差し伸べるべきか、あえて失敗させて見守るかの見極めが本当に難しい。冗談めかして「私は年の離れたお姉さんだと思って」と言ってきましたが、そんな大人がいてもいい、それくらいの距離でもよいのではと今は思っています。

私たちコーディネーターは、「みんな一人ひとり違っていい、人と比べなくていい」と言ってあげる存在でありたい。同時に、人と合わせなくていいけれど、相手を知ろうとする姿勢は大切だとも伝えたい。相手を知れば自分が分かるからです。

人が嫌いだろうと何だろうと、自分とは一生付き合っていかなければなりません。ときには自分の物差しが正しいかどうかで自信をなくすこともあるはずです。そんなときに具合を確かめるため人は人とかかわる。そうして支え合って社会が成り立っているのだということを少しでも示していければと考えています。

コロナ禍では特に人とのつながりが物理的に遮断され、社会はさまざまな歪みを残しました。自分と他人、首都圏と地方、見えない壁が立ちはだかり、自粛やマスクが当たり前の世の中になりました。この２年、学生の閉塞感、絶望、孤独はいかばかりだったかと胸が痛みます。こんな特殊な状況でコーディネーターとして何ができるのか。この２年間は迷い通しでした。

今年は幸い学生と対面で関わる機会が増え、今は逆に元気をもらっているようです。学生を支えたいと思ってきましたが、気がついたら学生に支えられていました。ここ立教で経験値を重ね、しっかりと力を発揮して還元してくれる学生たちを心から誇らしく思います。

私が授業で必ず伝えていることがあります。生で聞いた学生たち一人ひとりの言葉です。

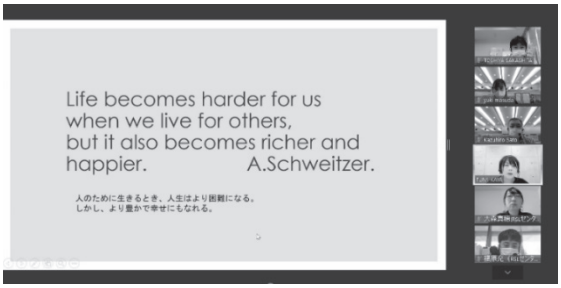
「自分の当たり前は、他人の当たり前とは違うことが分かった」、「幸せと思う軸はたくさんある。その人によって違う」、「今まで過ごしてきたのとは違う目線で社会を見ることに興味が出てきた」、「思いどおりにはならないことを学習する場だった」、「人との関わりから学ぶ、学ばされた」。

「ボラセン」は、ただボランティアを紹介する場ではなく、自分を知るための場であり、成功するためではなくて、失敗したり悩んだりしたときに戻る場所、充電器的存在でもいいのだと個人的には思っています。

人生は遠回りでいいではありませんか。大学や社会の中には、ショートカットは素晴らしい、得であると思う傾向があります。「早い、短い」ことは正しく、成功のバロメーターのように捉える節もあります。でも、急行では見えない景色もあるのです。鈍行の普通電車でもいいし、時には間違って反対の電車に乗ってもいいのではないでしょうか。

肝心なのは、そのときに見えた景色を忘れないでいること、経験や失敗を人に笑って語れるぐらい自分の中に落とし込むことです。

最後に、私が手帳に書きとめている言葉で話を締めくくります。ドイツの哲学者シュヴァイツァーの言葉です。「人のために生きるとき、人生はより困難になる。しかし、より豊かで幸せにもなれる」。立教での５年間で、私は人と関わること、つながりをつくることの大切さや尊さを学生から学びました。私自身もこの先どういう道に進むのであれ、この経験をしっかりと胸に刻んで歩んでいこうと思っています。



福原 充 氏講演会

『立教サービスラーニングセンターでの５年間を振り返って』
～「歴史」を問い直し、今をみつめ、生きている「現場」から、「これから」をつくる～

日　時：2021 年 11 月 22 日（月）10：00～11：10
場　所：オンライン開催 Zoom 使用
講　師：福原　充（社会連携教育課、RSL センター教育研究コーディネーター）
参加者：佐藤 一宏、阪下 利哉、廣瀬 かおり、増田 由紀、
　　内堀 勇二、大森 真穂、三浦 圭介

■初めての教育研究コーディネーターとして

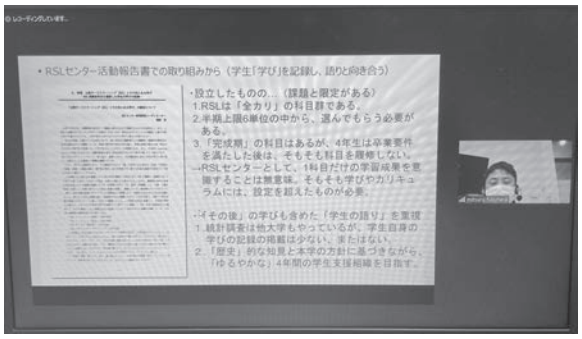
立教大学に立教サービスラーニング（RSL）センターが誕生したのは 2016 年４月。私はその翌年の 2017 年４月に RSL センター初の教育研究コーディネーターとして着任しました。入職直後、創設期ということもあってか、ドタバタしている状況はありましたが、幸運にも全学共通カリキュラムをつくられた寺崎昌男先生とお話する機会に恵まれたり、チャプレンをはじめ、他の教職員の方から、立教大学はどのような大学なのか、ご自身が立教生だった時のお話、教職員として大学教育（学生）に関わる楽しさ等、様々お話を聴かせていただく機会を多く得ることができました。私自身も立教大学の卒業生の一人ではありましたが、このような時間は、改めて自分自身が「立教大学とはどのような大学なのか」、「大学の果たす役割とは何か」といったことを考える機会になりました。また、冒頭にお話ししたように、偶然にも、私は RSL センターで最初の教育研究コーディネーターとして着任したということだったので、自分の職種の役割や組織の中での位置づけなどを、新しく「つくっていく」ことや「位置づけていく」必要があったことも、この５年間特有のことだったのではないかと感じています。

■「建学の精神」とは何か？何を大切にして RSL センターの理念を具現化するのか？

さて、RSL センターは、そもそもどのような意図を持って創立されたのでしょうか。立教サービスラーニング（RSL）の開講にあたり、2015 年３月の全カリの「News letter」（No.37）に、当時の副総長であった文学部教授の西原廉太先生（現総長）は、「立教サービスラーニング（RSL）は、本学の建学の精神である「PRO DEO ET PATRIA」にもとづいて、正課外教育（フィールドエデュケーション）の伝統と先端の経験教育の理論と実践的知見を融合した、全人教育および専門性を深める実践的教育手法」であると述べています。また、立教大学のサービスラーニング（RSL）が特に実践するものは「経験を学修に接続する姿勢の涵養」、「協働と行動の技法の養成」、「社会の一員としての責任感の醸成」の３つであると記しています。

さて、着任当時の私は、サービスラーニングについて研究論文等からの多少の知識しかありませんでしたし、立教大学の「建学の精神」についてもあまりイメージすることができませんでした。そこで、入職後、まず立教大学はどんな大学なのか、その中で「R」がついた「SL（Service Learning）」では何を実現していく必要があるのか、個人としても考え、向き合うことにしました。RSL センターが立教大学の「建学の精神」に基づいて創設された組織であるということ、また、新しくできたばかりの組織で、私の役職は、前任者もいない状況だったこともあり、自分が所属する組織が何を大切（軸）にして日々の業務

（現場）と向き合うのか、目には見えない「建学の精神」とは何か、私なりにより理解したいと考えたわけです。



しかし、自分の母校でありながら、それまで立教大学が、または大学がどんな場所なのか、真剣に考えたことはほとんどありませんでしたから、なかなか困りました。そこで、私は自分が教育史に関心を持っていたこともあって、立教大学の歴史等から「建学の精神」を探る・考えることにしました。今も時間を見つけて時々調べていますが、幾つか過去の資料を調べるなかで、例えば、最近知って調べたものとして、私が卒業した文学部教育学科（1949 年設置時は心理教育学科）では、1964 年に初等教育課程の存続について議論されていたことを知りました。資料によれば、この教育学科の初等教育課程は、その起源として、聖公会関係のミッションの小学校の教師に新制小学校教諭の資格を与えることを意図してつくられたのですが、当時、その目的は果たされたのでもう不要だろう等の様々な理由から廃止論が幾度か出てきていたそうです。ところが、当時の学科長であった、山本晴雄先生は、現在（当時）の国立大学は教科、授業のみに強い小学校教員の養成に終始して、教育者精神を育てていないのではないかと指摘し、その精神を涵養するにあたり立教大学のようなキリスト教系の私立大学の果たす役割は大きいと存続論を主張しました（『CHAPEL NEWS』第 125 号，1964 年）。そのこともあってか、現在も立教大学の教育学科には、初等教育専攻が残っています。また、この時、山本先生は非キリスト教系大学の模倣はやめようということも言っています。つまり、私立大学として、また、教育機関としての独自性を出そう、大切にしようという意識があったわけです。

では、その独自性とは何か。山本先生が述べた二つのうちの一つは、キリスト教の精神に基づきながら社会的弱者に寄り添うこと。このような考え方は、「PRO DEO ET PATRIA」や「自由の学府」といった、本学の教育理念にも通じるものであろうと思います。もう一つは、専門性のみを極めた人を育てるのではなく、人道精神に基づき、広く教育学、社会学、心理学を身につけた小学校教員を養成することです。このことは、現在の全学共通カリキュラムと類似する考え方ともいえますし、本学が目指している「専門性に立つ教養人の育成」にも通じる考えであるといえるでしょう。もちろん、この事例は、立教大学にある一つの学科の歴史ではあります。しかし、重要なことは、今の立教大学だけでなく、当然といえば当然ですが、過去の立教大学も個々の組織で、また、大学全体でその時代の諸課題をみつめ、自分たちの在り方を議論し、未来を創っていこう、そういった理念を教育カリキュラムの中に組み込んでいこうとする姿勢があったことです。こうした、教育機関として、積み上げてきた一つ一つの「歴史」のなかに「建学の精神」はあるのではないかと…。「歴史」を「過去」のものとして扱うのではなく、常に批判的に問い直しながら「現在」、そして「未来」へつなげるための「遺産」として意識することが大切なのではないかと、調べていくなかで改めて考えるようになったわけです。そんなわけで、私は、この５年間、困った時は常に歴史や、そもそもの理念に立ち戻ることを自分の「軸」にしながら、「R」＋「SL」＝「RSL」の理念を具現化しようと心がけてきました。もちろん、理念だけではなく、現実にどのように落とし込んでいくのかが重要なので、バランスをとることは、とても難しい作業でした。実際にどれだけ貢献できたのかはわかりませんが…。どうだったでしょうか？少しでも貢献できていれば、幸いです。

■学生の「語り」と向き合う。学生の「語り」から考える。

さて、この５年間の中での取り組みを一つあげて話して欲しいということで、様々、やらせていただけたのですが、今回は、記録としても残っている RSL センターの活動報告書の取り組みをお話させていただければと思います。

RSL は全カリの科目群ですから他学部のように所属の学部生がいるわけではありません。また、RSL は、全ての学生に向けて授業を展開しておりますが、４年間をとおして学生の成長を見守ったりすることが学部より困難ですし、学生も全学で約 6,000 科目あるともいわれる科目の中から、15 科目程度の RSL 科目群を必ず履修してくれるわけではないといった現実があります。さらに、全カリで履修できる

単位の半期の上限は６単位であるため、１科目２単位で計算すると、学生は半期で３科目しか履修できないことになります。この学生が選ぶ３科目のなかの一つに RSL 科目を選んでもらう必要があります。そもそも「全学的に開いた科目」とはいっても、教室の収容人数等の事由も含め、すべての科目に定員は存在しているため、「運営規模」にも一定の限界があるわけです。その他、卒業要件を満たした４年生はそもそも科目を履修することが少ないといった、課題もあります。

また、これらの課題とは別に、私は、１科目だけで RSL センターが目指す成果を捉えることは避けたいとも考えていました。そもそも学びやカリキュラムには運営者の設定をも超えた意図せざる結果があるほうがおもしろいですし、決められた設計の中だけで学生の学びが完結するのは、どうなのだろうと…。大学には RSL だけでなく様々な授業や学びがあるわけですから、RSL センターとしては、履修者の確保は大切ですが、一方で、４年間の学びの総体から学生を捉えようとする視点が重要だと考えていました。立教大学が正課教育だけでなく、正課外教育を学びの体系のなかに位置づけている意味もそこではないかと私は理解しています。少し前置きが長くなりましたが、一言でいえば、様々、条件があるなかで、RSL センターは学生とどのように継続的な関わりも含めた関係性を築くのか。このことが自分の中で一つのテーマになりました。

そこで、一つの企画として、毎年発行する RSL センターの活動報告書の中で、履修後も含めた、学生の「自分語り」を重視しようと考えました。この取り組みには、私自身の経験や日本の教育史の教育実践の一つである「生活綴方」などからも影響を受けています。

私は、RSL の実践系科目を受講した学生に声かけをし、面談を複数回重ねながら、①科目を履修する前に考えていたこと②科目を履修して気づいたこと・考えたこと③履修後にどのような変化があったのか・なかったのか。何をしたいと思っているのか・何をしているのかといったこと、他の科目と RSL 科目のつながり等について、一定程度の「量」も意識しつつ、8,000 字程度でしょうか。添削等もしながら学生に書いてもらい、それを報告書に「学びの記録」として毎年掲載することにしました。サービスラーニング等の経験学習では、授業のなかでのリフレクションが重視されたり、最近ではルーブリックを用いた授業の学習目標・達成度を判断する等の取り組みがありますが、この報告書は、授業後のリフレクションとして位置付けようということも意識していました。

また、統計的な調査や研究は全国的に行われていますが、学生自身の学びを文字として、また、論文やレポートでもない、生活の記録、学びの記録という形で、文字数もある程度多く設定して記録に残す例は、他大学の報告書等を確認してもないように思われましたので、他大学にはない、RSL センターの特徴にもなるのではないかと考えたわけです。

実際に学生と面談をし、文章の書き方についてやり取りをしていく中で、ゆるやかなものではありますが、学生と報告書執筆後も含めた継続的な関係性を築くことができたように思いますし、学生たちからも「書いてよかったです」、「自分の考えを整理できました」等のコメントをもらえたことはよかったなと感じています。私も等身大といっていいのでしょうか。現在の学生の姿から多くの気づきや学びを得ることができました。また、実際に完成した学生の文章を読んでみると、学生を１科目だけで捉えようするのではなく、４年間という時間やその先の学びも含めて捉えることが重要なのだと、学びとは重層的なものであることも改めて学ばせてもらいました。

そして、学生を囲うのではなく、RSL センターは全学的に科目を展開する組織であるからこそ、ゆるやかに学生の生活を見守る場、共に考え、成長する場として、「ゆるやかな学生支援」を展開する組織であるとよいのではないかといった考えを持つようにもなりました。また、このことは、立教大学が大切にしてきたとされる「学生支援（学生助育）」もそうなのではないかと感じています。

■最後に…

私は、RSL センターのような体験型の教育プログラム・学内外の様々な方と協同する教育プログラムは、注意しなくてはならないことが大きく分けて三つあると学ばせていただいたように思います。一つ目は、「現場」に関わる組織であることの裏返しとして、その意味を常に批判的に問い直すことに自覚的であることです。「教育」はチャレンジングなプログラムです。「現場」の影響力は強いため、少し気を抜くと、批判的にみるのではなく、決まった方向へ誘導する装置になりかねません。批判的な視点をどう維持し、「現場」とバランスをとっていくかが問われることを私は学ばせていただきました。二つ目は、学びの場となる「現場」には、実際にそこで生きている人たちがいるということを大切にすることです。私

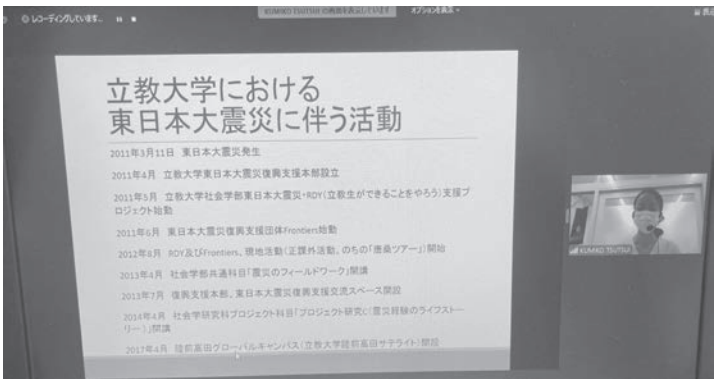
たちは「(立教) 大学」という教育機関だからこそ、ある種、苦労なく現場の人と一緒にプログラムをつくることができる機会を得られるわけですけれども、だからといって現場をないがしろにすることがあってはなりません。私も現地の方から様々、お言葉をいただき、失敗もしながら学ばせていただきましたが、そこに生きている人たちを尊重し、範囲を見極めながら真摯に向き合うことが本当に大切だと考えています。三つ目は、RSL センターのように、「建学の精神」や設立時の理念の中で組織された機関を大学という教育機関のなかでどのように育てていくのかということです。今後は創立期だった時期を終え、RSL センターはいろいろと組み変わっていくでしょうし、必要の是非は他の事例のように、時代に応じて問われていくのだと思います。どのような道をたどるにせよ、常に理念に立ち戻りながら、真摯に「あり方」を模索し、取り組んでいく組織であって欲しいなと、RSL センターで様々なことを学ばせていただいた一人としては願っています。

最後に、私は母校である立教大学にもう一度帰ってきて、スタッフとして働くことができるとは考えてもいませんでした。このような時間をいただけたことに心から感謝しておりますし、この５年間の全ての出会いと経験、学びに感謝しています。これまで学んできたことを活かしながら、私個人としても次の場所でも種をまき、また、種そのものになって、そこで生きる人々と共に育っていけるよう、精進しなければと感じています。本日は、このような場をいただきまして、誠にありがとうございました。

筒井 久美子 氏講演会

『東日本大震災後の 10 年』～失われたものとの共存～

日　時：2021 年 11 月 15 日（月）10：00～11：10
講　師：筒井 久美子（社会連携教育課　東日本大震災復興支援・陸前高田サテライト担当）
参加者：佐藤 一宏、阪下 利哉、廣瀬 かおり、小幡 彩子、茅 芙美、増田 由紀、
　　大森 真穂、中島 紀之、三浦 圭介



私は大学院でしていたことが今の仕事につながっていますから、その頃のことからお話します。始まりは、2011 年３月 11 日に起こった東日本大震災でした。立教大学はいち早く支援の活動に動き出します。当時、私は社会学研究科の大学院生でしたが、５月には所属の社会学部で「東日本大震災・RDY（立教生ができることをやろう）支援プロジェクト」が始まりました。また、６月７日には学生復興支援団体の Frontiers、Three-S が始動します。2012 年になると、この RDY と Frontiers が連携して現地活動を開始しました。2013 年４月に社会学部の共通科目「震災のフィールドワーク」が開講されます。同年７月には立教大学復興支援本部が東日本大震災復興支援交流スペースという場所を開設しました。2014 年４月になると、社会学研究科のほうでプロジェクト科目「震災経験のライフストーリー」が開講します。そして 2017 年４月に、立教大学がサテライトと位置づける陸前高田グローバルキャンパスがオープンしました。震災が起きて５年、その後こちらに来て５年は、この一連の活動に携わりました。

東日本大震災発生当時、私は自分の研究も進まずに悶々とする日々を送っていましたが、不思議なことに何かしなければという思いに突き動かれました。お金はないけれども時間はあるし、特に誰かを守らなければならないという立場でもない。自分のような者が何かしなければと思いました。そこで、現地で活動するあるボランティア団体の説明会を聞きに行きました。当時の厳しい状況を考えれば当然ですし、後から、本気で活動できる人を見極めるためのふるいだと知るのですが、参加のハードルがとても高かったのです。現地へ連れて行ってはくれるけれども、食料や寝床は自分で確保してほしい、というのが参加の最低条件でした。行く気満々でいたのに出鼻をくじかれ、結局、参加することができなかった自分にもショックを受けました。そんなときに、指導教授から、学生たちが活動を立ち上げるからサポートに入ってくれないか、とお声がけいただきました。私は学部生とかかわったことがほとんどなく、人見知りで、自分から活動を起こす経験もなかったので、正直、行動するのは怖かったです。でも、目をつぶって飛び込む気持ちで活動を始めました。

RDY や Frontiers が現地で直接、活動を始めたのも学生の声がきかっけでしたし、気仙沼の唐桑町への支援「唐桑ツアー」が始まったのも、個人的に先に現地入りしていた学生のつながりでした。Frontiers の活動は、震災直後は、出来事が大きすぎて自分がかかわっていいのかわからない、自分のような者が支援などおこがましいのではないかと躊躇していた学生に、活動への入り口を提供しました。

学部、大学院それぞれで開講した科目は、岩手県大槌町と陸前高田市、宮城県気仙沼市唐桑町に行って、被災を経験した方と関係を構築した上でライフストーリーインタビューというものに協力していた

だき、それを学生各自の関心に従って報告書としてまとめていくとともに、語りを文字起こししてアーカイブしていくという授業でした。私はここでもお声がけをいただいて TA として授業に参加し、事前指導、現地活動、報告書執筆というプロセスに関わることとなりました。この科目を履修した学生たちが、正課外の唐桑ツアーに参加して現地の方々と関係を継続したり、逆にツアーに参加していた学生たちが授業を履修してアカデミックなアプローチを学んだりと、正課・正課外が互いによい影響を及ぼしながら活動の仕組みをつくりあげていったように思います。

そのなかで一つ印象に残っていることがあります。「震災のフィールドワーク」立ち上げにあたり、2012 年にプレ的に行っていたゼミ活動で訪問した大槌町で出会った女性のお話です。大槌では震災当日に大きな火災があったのですが、当時はメディアの人たちが大槌まで入ってくることができませんでした。彼女は、火災があったことが、誰にも知られなくて悔しいとおっしゃっていました。そのときには、そういうものなのかと思っていました。しかし、毎年、大槌町に足を運ぶなかで、彼女の言葉の意味を考えるようになりました。壊れた建物が取り壊され、空いた土地が草で覆われ、そこに新たな建物が建てられ、町はどんどん変貌を遂げていきます。しかし、例えば 2015 年に初めて大槌を訪れた学生は、2012 年の大槌を知りません。これだけ大変なことがあったのに、当時のことを知らないと、そのまま見過ごされてしまいます。彼女が悔しいとおっしゃっていたのは、このような感覚に近かったのかもしれないと思いました。そこで、それまでは、被災した地域で写真を撮るのは失礼なのではないかと感じ、撮ることができなかったのですが、写真を撮るようになりました。また、現地で見聞きしたことを学生たちに積極的に話すことはしてきませんでした。活動のなかで序列をつくりたくなかったというか、回数多く現地を訪問している者が偉いといった雰囲気があったからです。でも、知ってしまった以上は、伝えなければならないのではないかと思うようになりました。

また、「震災のフィールドワーク」を履修した Frontiers の学生の気づきが唐桑ツアーを変えていくことになりました。2013 年に受講した学生が、地元の方の話を講演会形式で聞き、事前に決められた場所を見て回るのと、この授業のように少人数でお話しを伺い、話が盛り上がって時間を延長したり、お話しと関連する場所を訪れたりするのでは、質が違うということに気が付きます。それまでの唐桑ツアーは現地団体の活動に参加をしていたのですが、この気づきを受けて、独自に活動をつくるようになります。その結果、学生たちは「東北」や「被災地」を訪れる、「被災者」に会うという感覚から、「唐桑」に行く、〇〇さんに出会うという感覚へと変わっていき、卒業後も個人的に唐桑ツアーで訪れた場所を訪ねる学生も出てくるようになりました。

私が学生と関わる中で心がけていたのは、できるだけ「暇そう」に見えることでした。自ら引っ張って学生を鼓舞する方法もありますが、それよりは困った学生がいつでも気軽におしゃべりレベルで相談ができる人でいたいと思っていたのです。基本は待ちの姿勢で、ここは動かなきゃまずいかなというときにだけ、ほんの少し動く。しかし葛藤もありました。例えば、唐桑ツアーは学生が企画し、先生方にご相談に行くのですが、質問攻めにされて、しょげて帰ってくる。先生方からも学生への期待の声が届きます。戦うのは学生たちと先生方で、自分はそれを見守っているだけなのではないかと思っていました。

陸前高田グローバルキャンパスでは事務局とコーディネート業務を担いました。実はこの事業も、かかわる前までは懐疑的にとらえていた部分がありました。例えば、現地で開催している野球やバレー教室は、たった１日のかかわりに本当に意味があるのだろうかと思っていました。しかし、実際に関わることで考えが変わっていきます。ケガにより目標を見失っていたがそんな自分をかえるきっかけにしようと野球教室に参加したという学生がいました。彼は教室に参加した中学生から将来の夢を聞かれて「野球選手」と答え、そう答えることでどんな形でもいいから野球にかかわり、努力を続ける決意を固めたといいます。また、中学校の先生方から、来年はぜひうちの中学校のグラウンドでやってくださいと声掛けをいただいたこともあります。このように、実際に関わり、学生や現地の方々の声を聞くことで活動の意義

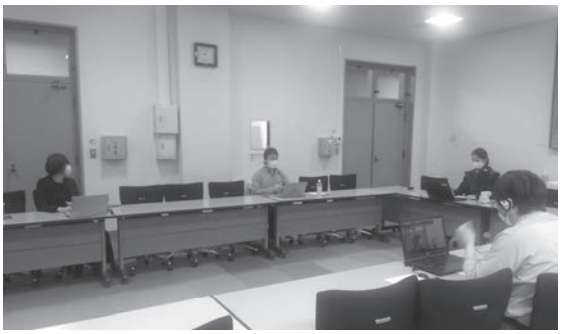
を感じることができました。

この 10 年は東日本大震災の風化の過程だったと思います。以前は、記憶の継承に取り組む意味が分からなかったのですが、忘れられていくのを目の当たりにすると、東日本大震災という出来事に多少なりともかかわり、知ってしまった立場からすると伝えなければならないのではという思いになります。活動を継続することは、個人的な思い入れや趣味として還元されがちです。確かに震災直後とは違う状況の今、復興支援という言葉自体に違和感があるのかもしれません。私自身、事前指導で被災状況を伝えているとき、いつまでも被災地として扱っていいのかと疑問を感じていました。ヒントをくれたのは、今年（2021 年）の 3 月 11 日に気仙地域の地元紙・東海新報に載った高校生の作文でした。「20 年後のふるさと気仙」というテーマに向けてその子が書いたのは、「失われたものと共存できるまち」。大切なのは震災経験といかに共存するかだ、それがやがて自分たちのまちを守るだけでなくて、いつかどこかのまちを守れるのではないだろうか、といった内容に、この先のかかわり方が見えてきたように感じました。かの地はもう被災地ではないかもしれないけれども、震災を経験し、それがまちを構成する大きな一要素であることに間違いはありません。震災を全く扱わないのではなく、前面に出すのでもなく、失ったもの、マイナスのところも共存しているまちと関わり続けることができるとよいのではないでしょうか。

座談会～立教大学の社会連携教育のこれまでとこれから（現場からのメッセージ）～

日　時：2021 年 11 月 29 日（月）10：00～11：30
場　所：池袋キャンパス５号館会議室　ハイブリッド形式（オンライン Zoom 使用）
参加者：茅 芙美（社会連携教育課、ボランティアコーディネーター）
　　：福原 充（社会連携教育課、RSL センター教育研究コーディネーター）
　　：筒井 久美子（社会連携教育課、東日本大震災復興支援・陸前高田サテライト担当）
進行役：阪下 利哉（社会連携教育課）
視聴者：佐藤 一宏、廣瀬 かおり、小幡 彩子、増田 由紀、内堀 勇二、大森 真穂、小野 真彩、
　　高山 智大、三浦 圭介

■軸を問い続けていく



阪下：本日は、ボランティアセンター（以下、ボラセン）、RSL、東日本大震災復興支援・陸前高田サテライト（以下、サテライト）それぞれの現場で５年間活躍されてきた皆さんの知見と経験を引き継ぎ、今後の発展の基礎資料として残していこうという趣旨でお集まりいただきました。まず、業務のなかで一番大切にしてこられたものを教えてください。

福原：私が携わってきたサービスラーニング（SL）はあくまでも一つの教育手法です。立教大学（RSL）では、４年間をとおして、学生に市民性を涵養するシティズンシップ教育を展開し、実践するといった目標を掲げています。私は、この目標を実際の教育現場の中でどう実現していくのかを RSL センターに限らず、関係者全員で議論し、実践していくことを大切にしてきました。立教大学では現在、全体で約 6,000 科目を開講していると聞いています。その中で立教サービスラーニング（RSL）の事業を考えたときに、学内にある、インターンシップ等の体験型教育プログラムとの差別化も意識するように心がけてきました。本学に限らず、大学では、様々な理念や目的から教育プログラムが展開されていますが、これからも自分たちの事業は何を大切にする場所なのか、他との違いは何かといった「軸」の部分を議論していただきたいですし、それがあって初めて、理想とする正課・正課外教育の協力連携といった部分にもつながっていくのだろうと思います。もう一つ付け加えるなら、ボランティアセンターをはじめ、正課外教育を展開する部署の役割ですね。今は全国の大学でボランティアセンターはありますし、また、新しくつくろう、地域連携しましょうという流れがあります。立教大学のボランティアセンターは、単に学生にボランティアを紹介するだけではない、学生支援（独自の「学生助育」）という姿勢で取り組んできた歴史がある。では、そこで行われる正課外教育は何なのか。RSL のような正課教育とともに常に問い続けることが大事だと思います。

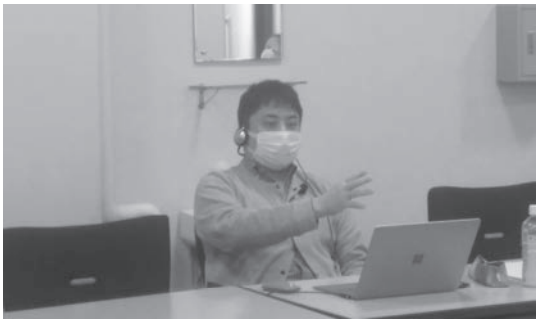
茅：私自身や、また周囲で一緒に仕事をしてきた方たちが大切にしてきたことは、ボランティアセンターの原点である、「共に生きる」という言葉にこだわりを持つことです。今、福原さんからもあったように、ボラセンが正課外教育をする意味を私たちスタッフ自身が常に考えていないと、ただの「ボランティアを紹介するだけの部署」になってしまって、極端な話、人間がしなくてもいい、ＡＩでもできるものになってしまう可能性もあります。

私たちコーディネーターが生身の人間として、学生に伝えていかなければいけないことは何かを日々話し合い、時には悩むことが重要だと考えます。そのうえで教育現場であることを常に意識しながら、学生にはボランティアの現場で感じたことを他人事ではなく、自分事として受けとめてほしいと願って接しているつもりです。たとえば志を同じくして集まった学生もそれぞれまるで個性が違います。一人ひとりに合った声のかけ方や寄り添い方で成長の支えになっていければと考えています。

コロナ禍では、活動が制限されて気持ちをくじかれてしまった学生たちにどう接するかが大きな課題で

した。ボラセンにとどまらず、RSL やサテライトとも情報共有しながら全体で見守る体制をつくっていく必要があります。
筒井：サテライトの役割は、社会連携教育だけにとどまらず、学部の正課、正課外活動のサポートをしたり、先生方の研究、また研究者を地域につなげていく、また、地域貢献として地元の方向けの教育の場をつくったり、交流拠点を運営したりと、研究と教育と社会貢献の３つの柱がある仕事です。そしてサテライトも、茅さんのお話の中に出てきた「共に生きる」が理念となって立ち上がってきたものです。この言葉を私なりに考えると、学生を現場につないでいき、そこに生きている人たちと出会ってもらうこと。そういう場を開くのがサテライトに求められているのだという姿勢で携わってきました。

■連携することでみえてきたもの



阪下：お互いに近しい距離にあり、連携や情報共有がしやすい関係にあることが、学生を支えていく上で重要な意味を持ちそうですね。
福原：RSL センターは、センターという名がつけられていますが、センターは文字どおり、一つの中心（中枢）であり、また、発信していく場なんですね。ボランティアセンターは正課外教育を含んだ情報を、RSL センターはシティズンシップ教育をサービスラーニングという手法を活用して展開していくことを、サテライトは大学の方針に基づいたプログラムの実施を、全学に発信していくわけです。「内」と「外」の両輪が合わさって初めてセンターは機能するのだと思っています。そういった意味では、さまざまな視点と組織を持ち、「社会連携教育」という名の下に事業を展開していることは、本学の強みなのかもしれません。業務での具体的な連携については、個人の善意や気持ちに頼るのではなく、全体で見取り図を共有し、役割を適切に振り分ける仕組みと構造をつくることが円滑な運営（人が変わっていくなかでの）の鍵だと思っていますし、意識してきました。

茅：私は新座キャンパスですので、普段は直接関わる機会はあまりないのですが、福原さんや筒井さんとの雑談の中で得たヒントを持ち帰ってボラセンで試みるといったことはよくあります。コロナ禍で在宅勤務が増えると、そこが欠けてしまう状況になり、あらためてとりとめもない雑談の大切さに気づきました。普段の何気ない話からもいろいろな発想が生まれたり、情報共有ができていたのだということです。
コーディネーターは時として「個」や「オリジナリティ」を発揮することが求められますが、抱え込む必要はないわけで、常に情報共有したり、垣根を越えて相談できる体制があるのがよいと思います。
筒井：ボラセンや RSL は学生がよく来る部署ですから、学生の様子を共有していただくことができました。必要があれば互いの部署ですぐに学生を紹介し合える環境は素晴らしいと思っています。近くにいると業務状況がわかったり、何となく漏れ聞こえてくる会話から、取り組んでいる課題や、今忙しそうだから時間を置こうとか、逆に暇そうだから話しかけてもいいかなという具合に、雰囲気がつかめるのもよい点ですね。先ほどサテライトは三本柱で走っていると申しましたが、そのように整理できたのも、正課の RSL、正課外のボラセンと情報交換をしながら仕事を進めることができたからです。
阪下：社会連携教育に関するホームページが立ち上がり、情報共有のプラットフォームが強化されつつあります。ここからどう発信していけばよいでしょうか。
福原：誰に向けた何のための広報かをまず整理したほうがいいと思います。立教生に向けたもの、広く一般に大学を知ってもらうためのもの、教育機関としての理念や成果を教育関係者（研究者等）に伝えるものとでは意味合いが異なると思います。その上で、ウェブ、ソーシャルメディアといったツールに応じて伝える情報の深度を変えていくという使い分けが必要になるでしょうね。

筒井：それぞれがそれぞれの対象に向けたツールを持って発信している現状をどうつないでいくかが重要だと思っています。人と情報のマッチングという意味では、学外向けか学内向けかという交通整理も必要ではないでしょうか。
高山：ウェブサイトの構築に関わった者として感じたのは、扱う業務が幅広いというのは社会連携教育課の強みですが、情報発信の面からは弱点になりかねないということです。広報でも青写真を設計して共有し、一つ一つ区切りを付けて発信できるといいのではないかと思っています。

■社会と教育をむすぶ拠点として

阪下：それぞれの立場が明確になり、連携が図られているからこそみえてくる改善点があるのではないでしょうか。
福原：ボラティアセンター、RSL センター、サテライト等、それぞれ定型の業務があるわけですが、決まったものを実施していくことに加えて、それぞれの活動にどういう意味があったのかをその都度、全体で共有するための「ふりかえり」は、その年度の事業目標とともに必須だと考えます。当然、学生に求めているだけでなく、私たち教職員も自分たちの体験・経験・成果を言語化し、見える化することが求められるわけですが、こういった作業の中で自ずと足りないものや重複するものがみえてくるはずです。良い意味で組織を効率化していけるのではないでしょうか。また、正課・正課外教育に分かれて活動するだけではなく、その間を「つなぐもの」をどうつくっていくか。学生のみならず、地域の方、関わってくださった方々を含めた「ふりかえり」は、それぞれの業務の位置づけや継承にもつながりますから、手間を惜しまずにしていくべきだろうと思います。
茅：今のお話は耳が痛いですね。経験のふりかえりや言語化の大切さは、私たちが普段、学生によく話していること。学生に伝えるだけでなく、私たちスタッフも同様です。今あらためて理念に立ち返る意味でも「ふりかえり」は大事な過程だと思いました。
またコロナを経て、これからボランティアの形は変わらざるを得ないでしょう。ただできないことにこだわるのではなく、じゃあどんな形ならできるのかという柔軟な発想が一層求められてくるのだろうと思っています。それは学生だけでなく我々スタッフ側ももちろんです。
筒井：お二人のおっしゃる通り、私もふりかえりをすることは重要だと思っています。一方で、人や時間が限られる中で、ふりかえりにまで手が回らないという声も聞かれます。ですので、「やるべきこと」と「できること」のバランスをいかにとるのかが課題だと思っています。この点についても話す機会が作れるとよいのではないでしょうか。
福原：理念や建学の精神に立ち返る姿勢は常に持っておくものとして、これらは目には見えないものだけに、実践にあたっては柱立てが必要になりますよね。それをするのが組織だと思うのです。ただ、理念や精神といったものの解釈は十人十色で変わってくる可能性がある。だからこそ、教育機関として、また、組織として意思統一をしておくことが大切だと考えています。理念や精神を前のめりに掲げることも問題ですから、どのように現実に落とし込むのかということを考える意味でも、理念などに立ち戻る姿勢とそれを実現するうえでの冷静な視点や判断について、日ごろから皆で協議することが重要だと思います。また、もう一つ慎重に進めたいのは地域の方との関係構築です。時間と労力のかかることですし、丁寧にやっていく必要がありますから、コーディネーターだけの判断ではもちろん無理ですよね。それこそ教職協働、総出の体制が必要だと考えています。
茅：外部の団体さんとのやり取りで継続性が難しいなと感じています。ボラセンは年度更新という形でお願いをしていますが、コロナ禍の中で連絡の滞ることもあり、疎遠になってしまう団体もあります。変化に合わせて新しいフィールドをどんどん広げていくことも大事ですけれども、既存の団体とどう関わっていくかも大切にしていくべきではないかと思います。時間も労力もかかることなので、現場だけではなく、ぜひ専任職員の方にも積極的に関わっていただきたいです。
筒井：マッチングもすればいいというものではないと思います。つないだはいいけれども、受けとめきれないとか、違うニーズが出てきて合わなくなってしまう可能性もあります。学生団体をどこまでサポー

トするかという問題はありますが、アフターケアも視野に入れる必要があるかもしれませんね。研究者がつながるときには、専門性が高すぎて、地元のニーズを超えて応えようとしてしまうこともあるので、そこの間をうまくつなぐ機能は必須だと考えています。

佐藤 : 皆さんのお話を聞いて二つのことを感じました。まず、立教大学は「社会連携教育」をどうするかを考えるより先にボランティアセンターができ、それから約十数年たって RSL ができ、現在の課が創設されたのは 2016 年のことです。だんだんと体制が整ってきたという経緯を踏まえ、ここからは一つの課として「社会連携教育」を捉えていく第二ステージに入ったのだろうと思います。

もう一つ、この課はボラセンと RSL を一緒にして正課教育と正課外教育の連携を図って立教ラーニングスタイルを具現化するところからスタートしてきたわけですが、お一人お一人のお話から、現場がどういう気持ちで動いてきたかを改めて実感することができました。課としてはもちろん、理念や目的、方向性、学生や大学の状況と随時、照らし合わせながら臨機応変に対応してきたつもりです。こうして新陳代謝を迎える今このときに、それぞれの言葉で思いを表明していただけたのはまたとない機会でありました。あとは受け継ぐ私たちがきちんと受けとめて咀嚼し、次のステップへつなげていく役目をしっかりと果たさなければならないとの気持ちを新たにいたしました。貴重な機会をありがとうございました。お三方のこれまでのご尽力に感謝するとともに、今後のご活躍をご祈念いたします。

総長室社会連携教育課長インタビュー

『立教大学の社会連携教育のこれまでとこれから（社会連携教育課設立の経緯と中長期的展望）』

総長室社会連携教育課長　佐藤　一宏

略歴
1984 年４月立教大学職員　教務部理学部教務課
1987 年４月学生部学生生活課
1999 年４月総務部人事課
2004 年４月学生部学生生活課
2011 年４月キャリアセンターキャリア支援課
2015 年４月学生部ボランティアセンター
2016 年４月総長室社会連携教育課
現在に至る。

Ｑ１．　総長室社会連携教育課の仕事の内容について説明してください。

大きく分けて、以下の４つの仕事になります。
① 立教サービスラーニング(RSL)センター
講義系科目、実践系科目の授業支援、履修に係わる学生相談、実践系科目の受入先機関との折衝等
② ボランティアセンター
学生へのボランティア活動に関する理解の促進、啓発、指導助言、ボランティアセンターが主催するプログラム、キャンプ、授業等の企画・運営、学生ボランティアサークル等の支援等
③ 社会連携系事務室
陸前高田サテライト、復興支援、社会地域連携、SDGS、産学連携等
④ 立教セカンドステージ大学
50 歳以上のシニア層を対象として「学び直し」「再チャレンジ」と「異世代共学」をサポートするために開設した新しい学びの場の支援業務

Ｑ２．多くの業務が様々な窓口で行われていますが、どのような経緯で設立されたのでしょうか。

総長室社会連携教育課は 2016 年４月に設置されました。今年で６年目を迎えます。
正課教育の立教サービスラーニングを全学共通科目の中に開設するために、正課外教育のボランティアセンターと一緒に運営していく組織が前提となっています。
理念的な統合の意味合いもありますが、一方で、小さな組織が一緒に協力・連携を推進していくことで、少しでもスケールメリット(人員削減)を生み出したいという事情があったことも事実です。

加えて、当時の総長室教学連携課が解体し、立教サービスラーニングセンターとボランティアセンターを一緒に運営する組織に、社会地域連携、陸前高田サテライト・復興支援、産学連携等を担当する部署が加わり、新たに社会連携教育課としてスタートすることになりました。2019 年４月からは、立教セカンドステージ大学が加わり、現在の体制となっています。

現在は、池袋キャンパスに事務室が３か所、新座キャンパスに事務室が１か所設置されており、管理職２名を含む専任職員が７名。教育研究コーディネーターが２名。ボランティアコーディネーターが２名。地域連携コーディネーターが１名。事務嘱託・派遣職員が３名。業務委託が３名の合計 18 名の体制となっています。

Ｑ３．正課教育と正課外教育を同じ窓口で業務を行うメリットは何でしょうか？

正課教育と正課外教育の両輪で学生の４年間を支援するという方針は、立教大学の教育の仕組み(枠組み)である「RIKKYO Learning Style」(以下、RLS と表記)の柱の重要な要素となっています。

立教ラーニングスタイルは、立教大学で学ぼうとする学生が、将来なりたい自分を思い描き、その目標に向かって自律的にそして着実に学び進めることができる、新たな学びのスタイルです。
入学から半年間かけて、全ての新入生を対象に行われる「立教ファーストタームプログラム」にはじまり、グローバルリーダーに欠かせない力を身につける「グローバル教養副専攻」、そして少人数をベースに進められる言語教育などとともに、正課教育と創立以来立教の伝統でもあるボランティア活動や立教キャンプなどの正課外教育の両輪で学生を支援するという、140 年以上にもわたってリベラルアーツ教育を実践してきた立教ならではの視点が、いたるところに生かされています。

日本には国公私立を含め数多くの大学が存在していますが、「正課」と「正課外」の両方で学生の学びを支援するという教育方針を打ち出している大学は立教大学のほかには見当たりません。つまり、立教大学独自の特色であるということができます。

立教サービスラーニングは「正課教育」の実践部局、ボランティアセンターは「正課外教育」の実践部局ですが、その２つが同じ事務室で、共通の理念で運営し、学生支援を行うことは「正課教育」と「正課外教育」の往還、つまり立教ラーニングスタイルの実践、具現化の場であるということができます。

立教サービスラーニングなどの科目で社会の課題や現実に触れ、もっと関わりたいと思った学生はボランティアセンターを活用することで、さらに体験を広めたり、深めたりすることができます。
また、ボランティア活動で現場に出会い、社会の課題に触れた学生は立教サービスラーニングをはじめとする様々な正課教育の科目を通して、その実態をより深く知り、分析し、行動に移していくことができるという意味で、「正課教育」と「正課外教育」の往還の場となっており、そのことが学生の人間的な成長にも寄与すると思っています。

【学生の事例】
・RSL ローカル(陸前高田)の授業を履修した学生が、継続して考えたいとボランティアセンターを訪れ、学内の震災関連の学生ボランティアサークルを紹介され、入部して、その後何度も被災地を訪れ、そこに生きる人たちとの関係性を重ねながら、自分自身の問いを深堀りしていった。
・RSL ローカル(南魚沼)の授業を履修した学生は、ボランティアセンターが募集しているポール・ラッシュ博士記念奨学金を活用して、仲間を募り、年に数回南魚沼の栃窪集落を訪れ、現地の人々との相互交流を重ねていった。
・ボランティアセンター主催の農業体験 in 山形県高畠町に参加した学生は、早々に大手企業から内定をもらっていたが、有機農業を基軸に食といのちを大事にしながら生きている方たちに接して、今一度自分の進路を考え直し、地方の活性化、地方創生に関心を持った。その後関連する授業を履修しながら、公務員試験の勉強を猛烈に頑張った末地方公務員に合格し、現在まちづくりに貢献している。

このような学生たちだけでなく、社会連携教育課が設立してから６年間にいろいろと頼もしい話が生まれており、その意義は確かに根付いてきていると実感しています。

Ｑ４．総長室社会連携教育課で働く職員に求められること、期待することは何ですか？

総長室社会連携教育課は、学生のみならず、社会に対して開かれた部署であります。
学生と社会をつなぎ、学生が社会や世界の課題や問題を他人事ではなく、自分事としてとらえ、自分なりに向き合い、考えながら生きていくことができるような支援と関わり方が求められています。

その意味から、社会連携教育課で働く職員に求められることは、

① 社会や世界、そして大学の動きに関心を持ち、社会連携教育課の仕事と結びつけて考えるアンテナを持つこと。

② 学生の成長、そして取り巻く社会状況にも関心を持ちながら、今できることは何かを考え続けること。

③ これ以上小さくできない最小限の組織でもあるため、一人ひとりが働きやすく、協力連携しやすい環境を整え、円滑なコミュニケーションを心掛けること。

今、社会連携教育課で働いてくださっているみなさんが日々実践されていることでもあります。

Ｑ５．今後の立教大学の社会連携教育について、中長期的展望などをお聞かせください。

社会連携教育課が設立して６年が経過し、設立期から第２ステージに移行する時だと感じています。

前述した、①立教サービスラーニングセンター、②ボランティアセンター、③社会連携系事務室、④立教セカンドステージ大学とも取り巻く状況は変化し、様々な対応を迫られています。

また、社会連携教育課は対象となる範囲が広範であり、何でもかんでも仕事として関連してくる可能性のある部署であり、対応が大変だと思っています。

西原総長の中期計画の中にも、望ましい社会連携教育課の組織の検討という課題が挙げられていますが、ぜひ積極的に検討を進めて、望ましい組織のあり方と持続可能な組織運営を考える必要があると思っています。

その際に、「社会連携教育」(立教サービスラーニング・ボランティアセンター)と「社会連携」(社会連携系事務室)のすみ分け=独立を行うのか、それとも「大社会連携教育課」の中に「社会連携教育」と「社会連携」を並立させるのか、という課題や、社会連携とは領域が異なると思われる「立教セカンドステージ大学」の取り扱いをどうしていくのか？など、現場だけではなかなか判断がしにくい、政策的な課題や問題については、西原総長をはじめとして、執行部および関係者・有識者が英知を結集して、方向性をしっかりと指し示していく必要があると思っています。そのために現場からの協力は惜しまないつもりです。

最後に、西原総長は立教サービスラーニングをさらに発展充実させ、立教大学の教育の根幹にしていきたいとおっしゃっています。

また、多くの教職員やチャプレンもボランティアセンターや立教キャンプなどの正課外教育プログラムは、建学の精神が具現化された立教大学の特色であり、継承していくべき財産であるとおっしゃってくださいます。

私たち社会連携教育課に勤務する者は、そうした思いを胸に秘め、誇りに思いながら今まで以上に仕事に取り組み、学生に関わっていきたいと思っています。

一方で、大学組織の中で持続可能な運営体制が、現在の社会連携教育課の大きな問題となっています。コーディネーター等は任期付のスタッフですし、専任職員も当然のごとく人事異動があります。

社会連携教育課の「持続可能な運営」について、ぜひとも学内の叡智を結集し、方策を見出していただきますよう重ねてお願いを申し上げ、私の話は終わりにしたいと思います。

Ⅶ. ボランティアセンターの概要

立教大学のボランティア活動は、「ボランティア」という言葉が社会に定着するはるか以前から行われており、キリスト教の精神にもとづく立教大学の教育理念を具現化するものとして、学内のさまざまな部署が学生支援のプログラムとして展開してきた。そうした精神を受け継ぎ当センターは、キリスト教の精神にもとづくヒューマン・ムーブメントの一環として、立教学院全体を網羅するネットワークの拠点として 2003 年６月に誕生して以来、立教らしいボランティアセンターの活動を追求している。

2016 年度から、立教サービスラーニング(RSL)センターが設立したが、その運営は立教ラーニングスタイルの意義に照らして、単に正課科目の運営に留まることなく、ボランティアセンターと相互連携を通じて、社会における体験的な学び(社会連携教育)を正課・正課外の両面から総長室社会連携教育課として一体的に推進できるよう積極的に関与していくこととする。

Ⅰ. 基本方針

1. キリスト教の精神にもとづくヒューマン・ムーブメントの一環であることを活動の精神的な支柱として据える。大学をはじめ立教学院全体の運動として推進を計る。

2. ポール・ラッシュをはじめとした立教学院関係者のこれまでのボランティア活動の成果と精神に学びながら、その継承と新しい視点からの発展を模索する。

3. 学内、学院内、地域での活動グループ、外部団体などとのネットワーク構築を図り、相互協力のもとでの活動の展開を進める。

4. 活動の中心的な担い手として学生の活動、企画提言、発想などを尊重する。

5. 活動者が自己を点検しつつ日常を顧み、かつ明日への意欲を生み出せる場、未経験者が気軽に立ち寄り相談や助言を受けることのできる場、そのような場である「ホーム」となることをめざす。

Ⅱ. 目標

1. 学生の関心、問題意識の喚起
はじめからボランティアに関心のある学生の数はそう多いものでもなく、それだからこそ、本学入学後にどのようなプログラムに出会い、ボランティアの意識にめざめるか、に焦点をあてて活動したい。日常われわれを取り巻く環境への意識、大学構内で出会う人への興味など、ほんの些細なことへの注意が見落としがちなものを見つめ直すきかっけとなること、行動すること、気づいたことを伝えていくことが、よりよい社会にしていく力になることを伝えていく。

2. 各種ボランティア講座、講演会、プログラムの充実
ボランティアって本当のところどういうものなの、というたくさんの「？」に応えるための講座を充実させている。国際化推進の動きに伴い、「海外ボランティア講座」相談会と報告会を開催し、学生が安心して海外でボランティアができる支援を行っている。特に、Gakuvo（日本財団ボランティアセンター）と協定書を締結したことにより、彼らのリソースを活用しながら、より一層の充実をはかりたい。また、実際にさまざまな活動をしている学生から直接話を聞く会（ボランティアカフェなど）にも取り組み、学生による学生のためのボランティア活動支援を始めている。将来的には、学生の人財データバンク化をめざしていきたい。「誰でも楽しいを目指したバリアフリー映画上映会」は、学生がいろいろな力を出し合い、本当にバリアをなくすことがどういうことか考えながら創り上げ、一般社会に広める活動となっている。

3. 近隣（福祉関係）学校等との日常的プログラムの開拓
筑波大学附属桐が丘特別支援学校や同視覚特別支援学校などと協働してのいくつかの試みは、学生や

教職員にとっても身近にしょうがい者とふれることのできる貴重な機会となっている。池袋では、NPO法人ゼファー池袋まちづくりやNPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークなどのプログラムに積極的に協力し関係性を密にしていく過程を通して、新規プログラムを開拓していくこととする。また、豊島区で学習支援や子どもの居場所づくり等の活動を行う団体のネットワーク（とこネット）の月に一度の定例会で、豊島区民社会福祉協議会をはじめ、約20団体と情報共有を行い、地域全体で子どもへの支援活動を行うことができるよう、キャンパスの拠点となる豊島区とのつながりを大切にしている。
新座では、学生サークルBambinoが新座キャンパス近隣の東野小学校の学童に通い、子どもたちと交流をしたり、パントマイムサークルのどりぃむ・ぼっくすが新座市のお祭り等のイベントに参加して地域との関わりを継続している。また、先述の東野小学校のボランティア会議にコーディネーターが定期的に参加し、情報交換を行い地域コミュニティとの連携を深めている。

4. 学生活動支援
学生主体のボランティア活動やプログラム作成の協働、ボランティア・カフェなどを継続的に開催することにより、学生やボランティア学生団体をつなげることを進める。さらには、両キャンパスのボランティア学生団体の協力・連携を深めるためにボランティアサミットやプレサミットの開催にも注力する。

5. 国内キャンプの主催、プログラム開発
立教学院一貫連携教育としての清里環境ボランティアキャンプや山形県高畠町での農業体験をはじめとして、新たなフィールド開拓にも意欲をもって取り組みたい。

6. 総長室社会連携教育課としての協力・連携の推進
ボランティアセンター、立教サービスラーニングセンターさらには復興支援・陸前高田サテライト、社会地域連携、セカンドステージ大学事務室も含めた事務組織である総長室社会連携教育課による一体的な推進体制を構築する。

7. コロナ禍におけるボランティア支援のあり方の模索と挑戦
コロナ感染の拡大により、ボランティアセンター主催行事である「清里環境ボランティアキャンプ」や「農業体験 in 山形県高畠町」のプログラムが中止となった。通常のボランティア活動も停止となったため、ボランティアをしたいと考える学生はもとより、学生ボランティアサークルも日常の活動や合宿ができず、活動の存続に苦慮している状態である。
ボランティアセンターとしては、新入生を中心としたオンラインボラカフェを実施したり、学生ボランティアサークルの相談にのったり、オンラインボランティアサミットを開催して、ボランティアセンターが学生をつなぐ役割を積極的に果たしていく。また、バリアフリー映画上映会についても、オンライン上映会に伴い、新しいバリアフリー映画上映会のあり方を求めてチャレンジしていく。2022年度は、コロナ禍におけるボランティア支援のあり方にさらに積極的に取り組む。

Ⅷ. ボランティアセンター運営協議会委員一覧（2021 年度）

運営委員一覧

センター長	首藤　若菜	経済学部教授
副センター長	中川　英樹	大学チャプレン
副センター長	結城　俊哉	コミュニティ福祉学部教授
大学チャプレンから１名	中川　英樹	大学チャプレン兼任
総長が指名する者１名	空席	
学生部長	安達　栄司	法学部教授
立教学院本部事務局勤務員から１名	渡辺　知世	総務部総務課
立教大学専任教員から１名	大山　利男	経済学部准教授
立教大学専任職員から１名	伊藤　秀弥	教務部学部事務５課課長（新座）
校友会から１名	清水　恒明	立教大学校友会副会長
センター長が指名する学外有識者１名	石森　宏	NPO 法人ゼファー池袋まちづくり相談役、本学校友
	小林　俊史	NPO 法人ゼファー池袋まちづくり理事長（陪席）

事務局

佐藤　一宏	社会連携教育課課長
阪下　利哉	社会連携教育課
広瀬　かおり	ボランティアコーディネーター（池袋）
茅　　芙美	ボランティアコーディネーター（新座）
小幡　彩子	社会連携教育課嘱託職員（池袋）
柚口　麻希子	社会連携教育課嘱託職員（新座　産休・育児休職中）
増田　由紀	社会連携教育課派遣職員（新座）

立教大学ボランティアセンター　2021 年度活動報告書

発　行　　2022 年３月 31 日
発行者　　立教大学ボランティアセンター
　　池袋キャンパス
　　171-8501 東京都豊島区西池袋３－３４－１
　　TEL.03-3985-4651 FAX.03-3985-4657
　　新座キャンパス
　　352-8558 埼玉県新座市北野１－２－２６
　　TEL.048-471-6682 FAX.048-471-7126
　　e-mail. volunteer@rikkyo.ac.jp
　　web　　https://spirit.rikkyo.ac.jp/volunteer/SitePages/index.aspx
印　刷　　東洋出版印刷株式会社